

904
To45



始



2-4137
7

904
93028
7645

徳富猪一郎著

杜甫と彌耳敦

東京民友社發行

大正
6. 9. 18
内空

欠

欠

合と云ふ能はずんば、多くの場合に於て、其の馮據者の氏姓を、本文中に掲載したれば也。此の如く負ふ所多大なりと雖も、著者自からも亦聊か若干の自得したる所なき能はず。但だ本書題目たるや、著者の懷抱に往來したる日の長遠なりしに拘らず、人事倥傯、專攻の機會少く、爲めに其の成績、頗る當初の計企に副ふ能はざるを遺憾とするのみ。

凡そ著作者に二種あり。甲種は家鷄的にして、乙種は家鴨的也。前者は自個の卵を自個孵化し、後者は他をして孵化せしむ。本文の著者は、其の系統よりすれば、乙種に屬す。其の脱稿する迄は、矢の弦上にあるが如く、全力を以て之に當るも、一たび脱稿するや、之を顧みるの勇氣なし。是れ疎懶と云はんよりも、一種

の性僻と云ふ可きに似たり。されば本文の『國民新聞』に掲載せらるゝ迄は、著者自筆自稿、自閱自校せり。されど其の輯めて一書を成すに際しては、草野、並木兩君に一任したり。産卵は著者なれども、孵化の勞は、主として兩君に感謝せざる可らず。著者恒に惟へらく、若し舊稿を補繕するの餘裕あらば、何ぞ更らに進んで新作に従事せざると。されば若し本文にして遺漏ありとせば、是れ固より著者の責任と云はざるを得ず。されど若し大過なしとせば、是れ亦た兩君の力與りて少からずと云はざるを得ず。

本書の目次及附録の年表は、並木君の製作に係る。本書裝釘の意匠は、平福百穂君に、挿繪圖に就ては、同君及び高島北海畫伯

に、且つ本書の印刷は、例に依りて民友社渡邊爲藏君に負ふ所あり。併せ記して感謝の意を表す。
曩に國民新聞創立二十五年祝刊として、蘇峰文選を出版するや、料らざりき天下の驩迎する所となり、殆ど此種の著作に就て、出版界の記録を破らんとしたり。今や民友社創立三十年の祝刊として、本書を出版す。若し江湖同好の君子、著者の微衷を諒とし、教誨を忝うするを得ば、固より望外の至幸也。

大正六稔八月念二 湘南 老龍庵觀瀾亭の一角に於て

蘇 峰 學 人

千載詩亡不復刪。少陵談笑即追還。

常憎晚輩言詩史。清廟生民伯仲間。

陸游

杜甫と彌耳敦目次

第壹章 總論

一 新聞記者の詩人論……………一

大體の企——興趣禁ずる能はざるが爲め——著者と杜少陵——杜工部集——著者と彌耳敦——彌耳敦詩集を諷誦——耐久朋の杜甫と彌耳敦——自から驚進する所以——今人に向て暗示默照を貢獻

二 詩とは何ぞや……………七

詩の定義と解釋の危險——詩は人類最初の記録——詩と人類生活との關係——詩の形式と内容との混同——二者與に是にして又た與に非——古今集の序文——アリストテレスの詩の本旨——模倣より寧ろ表現——人類に永久なる慰安の靈菓

三 神と人との合の子……………一二

目次

詩人とは何ぞや——隨處隨時詩世界の創造——詩人は生長したるもの——詩人の一半は人造——造化の兒亦た人間の兒——詩人は自然と人間との合の子

四 詩人の戸籍帳

一六

普遍的に萬有を表現——社會と時代にも接觸——基督も孔子も釋迦も皆然り——詩人も亦時勢の兒社會の兒——大詩人の大詩人たる所以

第二章 彌耳敦以前の歐洲及英國

五 文藝復興

二一

二大思潮に就て一瞥——文藝復興と宗教改革——文藝復興の曙光——伊太利に於ける文藝復興の斷案——基督教の腐敗に代ふる偶像教の腐敗——一種の享樂主義の宣傳

六 宗教改革

二五

宗教改革と反抗の二方面——宗教改革の火と路錫——羅馬人と獨逸

民族——瑞士のツウイングリ——文藝復興の大解放を會得す——カルウインと神政府の建立

七 英國に於ける復興と改革

二九

英國に於ける文藝復興の氣運——顯理八世と英國教會の獨立——三派教徒の分立と争鬭——英國にも反抗的準備あり——清教的反抗の激成——顯理八世の功没す可らず——復興と改革との提攜斷絶

八 エリサベス時代

三三

エリサベス女皇時代の低徊——英國史上の高潮期——英國海權の扶植時代——人望ある女皇——女皇の周圍——女皇と英國國教制度の基礎——女皇の晩年と民望——歐洲大陸の兵亂と英國の小康——民權的自覺心の増長

九 清教徒

三八

エリサベス女皇の晩年——清教徒の反抗を激成したる所以——三種の清教徒——清教徒と文學及藝術——清教徒の反抗に對する威壓——反抗の氣勢倍々騰る——多くの遺物

一〇 文學の黄金時代……………四二

英國文學の黄金時代—文藝復興の大氣運に促進せらる—英國文學史上の巨人沙翁—詩人としてはスペンサー—シドニーの武士標本的行動と『護詩論』—フッカーの散文とペーコンの論文—英國の氣運と文學の特色

一一 必至の革命……………四七

エリザベス女皇の死と惹斯一世の迎立—惡主にあらずして弱主—ノックラスと蘇格の宗教改革—國立教會と結託—前代老臣の凋落—惹斯一世の惡政—太子顯理の夭折—外交政策の不成功—王家と議院との衝突

第三章 彌耳敦生涯の第一期

一二 反抗者……………五三

反抗時代の反抗者—詩人の二大別—詩中に自傳的の暗示諷刺—中間二十年は政戦の中心に在り—彼の傳記と評論

一三 幼年の教養……………五七

彌耳敦の生誕と其時代—父は理想的の愛育者—特に彌耳敦を愛重—庭訓に負ふ所多大—家庭教師と學校の先生—彼の篤學と幼少時代の志望—彼の十歳時の肖像畫

一四 大學生活(一)……………六一

劍橋大學に入學—當時の劍橋大學—在學一年にして休學—在學七年餘—學問上の常經者—『基督校の淑女』—彼は文弱漢ならず—一般混濁界に孤立

一五 大學生活(二)……………六五

美德却て不人望—彼は學科に秀いで端正の君子と認めらる—彼と特待校友—斷乎初心を離へず—沙翁の金棒曳として門出—大學よりは優遇—精神的變化を感受せず

一六 詩人的修養(一)……………六九

父の高齡と棲遲—ホルトンの光景と彼の閑生活—天地の一人—一生の大本領を道破したる短歌—無職業的生活と父の認容

一七 詩人的修養(二).....七三

詩人たらしめとして詩人たり——天意を奉養する預言者的清職——善書の選擇と靜思——彼の備忘録と其内容——彼の勉學の方法と彼の性情——豫め不朽の人たらしめとして

一八 清福の時期.....七七

幽棲六年間の清福——ラレグロとイルマンセロソ——天然を大觀せり——直に天開を闢く——兩詩は双生兒——前詩の内容——後詩の内容——頂天立地獨自一己の詩人

一九 魔神の謠曲.....八一

『魔神』に於て一段の成功——一人の少貴女と魔神——二人の兄弟と守護神——舞臺再轉魔神の巢窟——魔神と貴女と兄弟——女神サアリナを招く——徳を愛せよ唯徳是れ自由——謠曲の場所と演者——不清淨主義に大鐵錘——青春の快樂を滿喫

二〇 詩中の彈詞.....八六

青春期掉尾の作『シダス』——學友を弔ふの悼歌——彼等兩人は最後

二二 伊太利旅行.....九一

秀者——キングの死と追悼の諸作——兩個の牧羊者——低徊趣味の發揮と三個の形姿——英詩の高水準に達す——愈々戰旗を翻へす
一代記に於ける光明の一節——巴里にクロチウスを訪ふ——フロレンスに愛著——羅馬に二個月滞在——彼の天性と南歐浩蕩の雰圍氣——男子の貞操を主持——マンソ老侯の驕迎——踵を回らして歸途に就く

二三 歸國の途上.....九五

悠々として還る——顔を開き思想を開させ——無事フロレンスに抵る——ガリレオとの會見——天文学の老大家と光彩四射の新詩人——親友ザロダチイの死と弔詩——古典語詩中の第一傑作——彼の歸國と學究的生活の持續

第四章 英國革命時代

二三 查斯一世(一).....九九

查斯一世に關する概念—時勢と位置との犠牲者—暴君暗主にあらず—重なる缺點は二枚舌と小策—事物の真相看取の不可能—人心操縦の妙機なし—皇后の愛の爲に千古不磨の悲劇

二四 查斯一世(二).....一〇三

不幸にして帝王の專制を自覺せり—幼時の教育と見聞—政治思想の不一致と宗教の齟齬—皇后に對する過度の尊信—皇后は一種の厄神—皇后の大膽勇猛—皇后の容貌と舉措

二五 革命の收穫者.....一〇七

查斯一世は革命の收穫者—窮極の問題—彈劾請願の豫言的中—彈劾者の急先鋒—侃譁の言論と投獄—第二議院の解散と第三議院の召集—權利の請願を以て酬ゆ—議院の反抗と停會—パツキンガム刺容に斃る

二六 大監督ロード.....一一二

議院の解散と民黨領袖の投獄—ロードは宗教的施政者—彼の人物の想像—彼の容貌—事實に於ける英國の法王—善意を以て天

下を諷る

二七 大變節漢乎否乎.....一二六

所謂大變節漢と其の心事—彼は大地主にして豪族—民黨王黨の大立者の對峙—彼の容貌と人物と經緯—夙に政争の根本問題に接觸—主要の目的は君國に貢獻—愛蘭に於ける專制君主

二八 徹底主義.....一二二

兩者の徹底政策實行勢力—裁判官の判決に一轉語を下す—大なる間違ひは國民を誤解せり—愛蘭に於ける恩惠的專制君主—如何にして其志を英國に實行するか—英本土は愛蘭と同視す可からず—王黨中第一流の人物

二九 十一年の匪政.....一二六

無議院十一年間の匪政惡政—全く人民の公益を無視するに非ず—國民に取りては堪へ難き疾苦—反抗の第一聲—民黨側に於ける一個の完人—蘇格人民の激甚なる反動—蘇格人民の意見と覺悟—蘇格の謀叛

三〇 監督戦争……………一三一

餘儀なく要求の認許—ウエントウオリスを招致—鞭笞主義—愛
蘭に於て目的を果せり—議院の領袖と蘇格の叛徒—戦ふを欲せ
ず—時事の非と蘇格叛徒の脅撃—蘇兵優勢—敵は背後にもあり
—査斯王の困憊と長期議院

三一 民黨の大立者……………一三六

劈頭の議院政治家ヒム—民黨議員總代十二人中の一人—所謂
『悪靈』の魁首—バツキンガム彈劾の重なる提出者—ヒムの辯論と
其の統率的技倆—眼識を實行するの手練と手腕—議院の特權尊
重者—天分に於て革命家ならず

三二 帝王ヒム……………一四一

國家と結婚—ミラボ、以上の徳操と品性—脚實地を離れざる政
治家—諸家のヒムに對する批評—平凡なる非凡人—二時間の大
演説—ハムデンと與に民黨の大極柱

三三 孰か機先を制す……………一四五

長期議院の召集と民黨—新局面展開の期待—議院の中樞人物は
ヒム—ウエントウオリスの招致—民黨に取りて危機一髪—ヒム
に機先を制せらる—大逆罪の犯人として彈劾—退去尋で入獄の
申渡—驚く可き身世の轉變—時勢に逆行したるの罪

三四 丈夫兒の死……………一五〇

原被兩造の奮闘と天下の壯觀—兩雄の機鋒相接す—問題は首に
あり—國家に對する大逆罪—急激派の非常處分法案提出—議院
の横暴極まる—査斯一世弱點の暴露—自ら一死を分とす—偉大
なる人物

三五 民黨の大抗論書……………一五五

宗教問題に對する硬軟の兩派—民黨の分裂—重大の兵權問題—
王の蘇格行と民黨の監督除外案提出—噴火山上に立つ民黨—ヒ
ムの大抗論書提出—議場形勢の不穩—兩派公然分裂

三六 自業自得……………一六〇

意志薄弱の質物標本—感情の衝突と行動の不一貫—民黨の五名

士を弾劾——王自から下院に團入——王曰くヒムは焉くにある——總ての島は逃げた哩——再來の日は最後の時——内亂の破裂

三七 戦闘開始……………一六四

王と議院との交渉——相當の理由なければ動かず——百計盡きて王軍の大旗——王軍と議院軍——勤王の爲めに一身を犠牲——中心の哀痛と滿腔の嫌惡——去就進退の煩悶者——戦争動機の一半は宗教

三八 兩軍交綏……………一六八

背景たる當時大勢の略叙——當時の戦争と武器——王軍の首力——議院軍の總司令官と最初の衝突——混亂を以て始終す——ブルツク卿とフォクランド卿の戦死——出陣に新らしき褌衣——ハムデンの戦死——ヒムも亦逝く——國家の爲めに心身消磨

三九 哥倫(一)……………一七七

眞個の統率者哥倫——一世の大人物——予は生れながらの紳士——彼の學問は一卷の聖書——人間は奉公の爲めに生る——彼の宗教的情——無議院十一年の生活——當時彼の風采——彼の音聲と雄辯——

長期議院に於ける彼の地位

四〇 哥倫(二)……………一七七

哥倫は不可解の人物——他を説服するに長ず——委員會に於ける彼の態度——上帝と直接に接觸——意外の邊に意外の人物——自問自答にて大事を處するの力

四一 鐵騎……………一八〇

四十二歳にして陣頭に立つ——騎兵隊長となりて荒人と荒馬とを訓練す——士氣の有無と兵員の素質——實行と興に眼界の擴大——事は爲さざる可らず——宗教的熱心を以て王軍に當る——死生一髪時の冷靜

四二 マアストン・ムーアの激戦……………一八四

議院軍中の哥倫と王軍中の查斯王——兩軍決戦の時節到来——兩軍の對陣——議院軍の陣容——王軍の陣容——對陣五時間——兩軍の接觸——兩軍騎將の雄の接觸——ルヘルト親王を破る——議院軍中央と右翼との敗戦——順勢の支持者——哥倫の進出——更に敵の中軍に向ふ——

レスリー將軍の感嘆——何れも所信に殉す——嗚呼果して彼なりしか

四三 新模範

一九〇

議院軍の諸將と哥倫——軍紀に違背せず上官に反抗せず——主將は戦争に不熱心——緩急兩派の衝突——自制法案の提出——副司令官に就任——議院軍の兵權と新模範兵——總司令官の人品

四四 ネズビーの大勝

一九五

實力試験の機會到来——王軍は驕氣充溢——議院軍自身不安——全軍踴躍哥倫を迎ふ——勝利の確信——兩軍の對峙——兩軍の陣容——王軍より開戦と議院軍の不利——哥倫の進撃と計畫の的中——第二回の回轉——全勝には最後の一回轉を剩す——王は討死せんと思召す乎——議院軍の大勝と戦利品の手筈——此一戦と哥倫の地位

四五 暗黒史の一頁

二〇二

陰謀詭策の暗黒史——民黨の同志喧嘩——詭策の不成功より來れる必然の結果——第一の面倒は蘇格人——蘇格人と查斯王との内密交

四六 查斯と哥倫

二〇六

涉——議院の第一問題は軍隊解散——軍隊と議院との衝突は自然の勢——巴字狀の交争と查斯王の胸底——王に取りては不幸の對手
兩者共に時代の犠牲——哥倫、王に負く乎、王、哥倫に負く乎——去る能はざる所の三者——敵も味方も信頼せず——王蘇格兵に投ず——哥倫の斡旋——兩者の軋轢重大となる——汝の命令書は焉くにある——何處までも鎮靜力

四七 情けなき命數

二一〇

哥倫の婿アイルトン——アイルトンの人物——哥倫に次げる軍隊の精神——王と軍隊との仲絶中止——王を廢して皇太子を擁立せんとす——政治家としての哥倫——王の陰謀と第二の内亂——軍隊と議院との勝負——大逆罪の議決と死刑の宣告——死して復讐を遂ぐ——王の刑死は哥倫の本意に非ず

第五章 彌耳敦生涯の第二期

四八 私塾の村夫子……………二一七

私塾の村夫子と其の行徑の冷評——何よりも先づ詩人——不朽の大作を心掛く——彼の手記と失樂園——講學授徒に餘念なし——何事も全力を傾倒せり——彼の教育主義——彼が教育の本旨

四九 小冊子戦争……………二二一

革命の渦中に投ず——一大目的の爲めに決心——ペンを以て戦ふ——精力充實の二十年間——失樂園の豫習作業——彼の火箭と監督教會——彼の散文は詩人的散文——哥倫の演説と一般——報効の爲めの散文——彼のペンは歐洲の恐怖

五〇 詩人的結婚……………二二六

自から得たる彌耳敦の不幸——新婚を娶る——ポウエル家——此の一事十分の解説を缺く——早くも新家庭に寛障——教養なき鈍根の少女——美に酔ふの弱點——相互の失望

五一 破鏡覆水……………二三〇

彼女の歸寧——新婚の不歸と離婚論の出版——蜜乳月の際に離婚論

五二 離婚と自由出版……………二三四

の起稿——天下騒然として之を咎む——輿論に容れられず——私憂を演釋して天下の公憂とす
離婚論の増補出版——彼に對する非難の絶頂——文房商協會の制裁——反撥の勢を激揚す——検閲制度の大打撃——平生屑とせざる所——出版検閲は羅馬舊教の迷法——若干の除外例——論理上到底兩立せず——彌耳敦を苛責せず

五三 一波萬波……………二三九

謔諷の焦點と一身の無事——彼の長老派——長老派黒書中に特筆——二個の離婚に關する小冊子——ネズビの大勝と彌耳敦の社會的立場——實行に於て更に大膽——ポウエル家の困窮と復讐の得策——訪問の親戚先にメリを匿す——同棲と轉居——詩集出版の機會

五四 高峰墜石……………二四四

獨立派中の獨立派——ポウエル一家の同居——老父の永眠——父に負

ふ所多大——私塾を罷む——三個の著作に著手——極端なる共和論者——讀者に警告する所——一夫の封を誅する目的の論理

五五 一 轉機……………二四八

外國語書記官の就任は生涯の一轉機——彼の出身と奉公の丹誠——政府彼を求む——彼が表面の職掌と在職十年間の起草文書——彼の視力と自己の愛惜——詩人的高調と志士の意氣の化合——容易に得可らざる經驗

五六 文壇の奏動……………二五二

豫言者の如きベン——偽善なく矯飾なし——彼のベンは最も活動せり——『王の肖像』の作者と『肖像破砕者』の作者——相手を粉砕するは彼の本色——歐洲一般の通用語は拉典語——サルマシアスの文筆——サルマシアスの著書と彌耳敦の辯駁書

五七 歐洲的高名……………二五六

歐洲の文壇に於ける一段の壯觀——學者社會の狂喜——寧ろ論鋒の

犀利を痛快とす——勝利は彌耳敦にあり——サルマシアスの死——世論の大多數は彌耳敦に與みず——歐洲的名譽の大文豪——哥倫の武勳と彌耳敦の文勳——崇上なる職分に殉して視覚を失へり——勇士の劍を取るが如くにベンを取れり

五八 失明の厄難……………二六一

失明は人生の一大厄難——辛抱は彼の特色——泰然として其枷を負へり——予は断念せり覺悟せり——眞の明は神の誘導と天命とに存す——厄難は又た彼の家庭を襲へり——一家の荒寥慘凄——彌耳敦に對する個人的攻撃——此書の著作者と彌耳敦の駁撃

五九 餓饉の饒吻……………二六五

愈々片意地となる——モラスは如何はしき評判の男也——心頗る之を恐る——彌耳敦の反駁書——モラスの辯解——饒吻を逞うせり——此の小冊子の價值——哥倫に對する讚美

六〇 哥倫と彌耳敦(一)……………二六九

兩人に對する外人の嘆美—兩人の關係—事實に遠き假構—公務の必要以外關係を有せず—哥倫に向て英雄崇拜的高調—彼は一人一黨者—彼が哥倫黨なる所以

六一 哥倫と彌耳敦(二).....二七三

哥倫に向て種々の忠告—出位の言—教會制度に於て意見の不一致—彌耳敦の失明と職掌の變化—哥倫の位置と勢力—彌耳敦執筆各様の文書—最も出色の文字—英國輿論の沸騰

六二 哥倫と彌耳敦(三).....二七七

彌耳敦の小康的生涯—繼妻も亦近く—哥倫の逝去とマイヅトンの弔文—哥倫とマコレーの英國史—英國史上—一種出色の人物—風雲の氣兒女の情—更に大なるものあり—善人の擁護者にして惡漢の恐怖—若干の異論あるも沈黙—公論は眞英雄たることを承認す

六三 最後の奮闘.....二八二

彼の故吾に返れり—第一第二の小冊子—彌耳敦の混職—第三の小冊子—第四の小冊子—寧ろ勇剛の精神を賞嘆—彼の奮闘力愈々猛烈—查斯第二世の凱旋—彼は到底反抗者—彼の保身は不思議—生涯の第二の幕下る

六四 意見の變遷.....二八七

意見變遷の總勘定—實に長足の變化—問題は共和政治の處理—唯だ神と相對す—寧ろ形式の排斥に拘泥す—哥倫の大解説と彌耳敦—周圍の變遷と意見の變遷—彼の清節を疑はず—一貫せる自由愛好の熱情

六五 反動時代.....二九二

清教徒的革命的最後の結果—鄙夫時代と彌耳敦の境遇—精神的物質的共に多大の打撃—學生の大望と新生涯—其志毫も渝らず—大作に取掛る—失明は恐る可き不幸

六六 一片の暗黒史.....二九六

親近に双眼者なし—年少の諸友期せずして来る—一卷の中に六人の手跡—三個の女兒—無教育にて成長—煩勞と反抗—次女最も不良—父の愛と彼の末女—「不親切なる子供」—失明に加ふるに家庭の不幸

六七

家庭の小康

三〇一

家庭の整理と後妻—晩年に於ける一點の温光—二十年の雪虐霜打と彼の硬化—彼の身邊と會心の友生—友生に對して親切—音樂の嗜好と其姪—家庭其緒に就く

第六章

彌耳敦と其の大作

六八

大作成就

三〇五

失樂園の著手期—最後の思出に其力を集注す—全篇の脱稿—大出版の緒に就く—契約書と原稿料—失樂園の出版—如何にして大作を成就したる乎—併せて古人をも凌駕せり—死灰中より火焔—五十八歳にて大成—彼も亦不朽

六九

何故に失樂園を作りたる乎

三一〇

少年時代より一貫の志望—詩人たる可く生存—初戀は他にあり—疑雲怪霧中のアーサー王武勇傳—神の大道證明と好題目—信認の記録と信仰の告白—史詩の體は鬼に金棒—彼の天才は歌行的—國語を以て歌へり—長所を發揮するに好都合

七〇

彌耳敦と失樂園

三一五

一曜にだも値ひせず—類似の點—題目の結構と建設—借用して善化—失樂園と二大潮流の合流—教養と趣味は前々代の遺物—カルウイン派牧師の口吻—失樂園は彌耳敦の鏡也—彼の不幸と此の大作

七一

失樂園の宇宙觀

三一九

彌耳敦の宇宙觀—宇宙は四個を以て成立—天は神の御居—天使會同の所—混沌は萬有の子宮—惡魔の大評定所と地獄街—彌耳敦の所謂る世界—地球を中心として—太陽中心説と地球中心説

七二 失樂園の梗概

三二三

物語の梗概—神の宣命と大天使の謀叛—平和なる天界の激戦—
遂に地獄の中に陥る—世界と人との創造—魔王と黨與の大會議
—魔王の偵察—混沌の頂上に達す—遂に地球に達し樂園に降下
—魔王の誘惑

七三 失樂園解題(一)

三二七

失樂園の本色と解題—全篇十二卷—直ちに本題の地獄—魔王の
大評定所出来—大討論の開始と全能主に對する復讐—魔王自か
ら新世界の踏査—全能主と神子の身代り—魔王樂園の附近に下
降

七四 失樂園解題(二)

三三一

魔王愈々誘惑の手掛りを得—ウリエルの忠告と魔王の逃去—天
使ウファエル來り訓示す—天使の警告—天使の説話—天使樂園
を去る—魔王の誘惑と兩人の墜落—神子の懲罰と魔王及び兩人

—天使マイケルと亞當—兩人樂園の失墜と大團圓

七五 全體の結構

三三六

失樂園に對する一片の觀察—失樂園愛讀の理由—其作の不朽普
遍なるが爲め—平凡なるが故に好題目—作者の力に相應したる
大題目の成就—失樂園と全體の結構—但だ彌耳教や然らず—博
士ジョンソンの批評

七六 主人公は誰ぞ

三四〇

不完全にして崇美の大作—十二卷を一氣呵成に飛過—極力の描
寫は魔王—魔王と大天使の面影—魔王の人格とカーライルの斷
定—王政恢復の時哥倫に想著—魔王の粉本は哥倫—魔王の一去
と舞臺の寂寞

第七章 晩年の製作と其の終焉

七七 時代思潮の代表(一)

三四五

二個の大なる矛盾——失樂園第一卷第二卷の氣魄と光輝——モロツクの主戦論とベリアルの平和論——局面の展開とベルセパツアの起立——長期議院に於ける雄辯の影寫——獨闢の乾坤を占得——覽群大評定と英國議會の議院法——時代の鏡と作者其人の鏡

七八 時代思潮の代表 (二).....三四九

大なる意味の時代思潮の代表的作物——彼の教養と思想見識——亞當に對する破的の名評——ティメの評言——意外の副産物——大なる獲物は彌耳敦の眞影——彼の學生の心事——本色の歌行と戯曲——魔王と婦人の弱點——樂園退去の大團圓

七九 復樂園 (一).....三五四

復樂園に就て一瞥——復樂園は失樂園の附庸——極めて單純の筋書——復樂園の本事と基督——兩者相濟ふの悦び——復樂園著作の経路——エルウード自傳の所記——樂園復興の事は奈何——復樂園の製作時代

八〇 復樂園 (二).....三五九

復樂園と失樂園との優劣問題——復樂園の賞讃者——復樂園の内容と作者の伎倆——十二分の老腕——マチソンの評言——熱情と素樸——豪華落盡見天真

八一 サムソン (一).....三六三

サムソンに就ての概評——彼の素志は寧ろ劇詩家——四圍の情況と彼の中年以後——演劇の停止と彼の史詩——畢竟手段の問題耳——最終の重なる一詩——サムソンの境遇と彼の境遇

八二 サムソン (二).....三六七

サムソンの筋書——寧ろ甘じて神罰に服せん——病める獅子の如く——神の攝理を讚美して局を結ぶ——此の悲劇と作者の小序——老後の思出と年來理想の劇詩

八三 サムソン (三).....三七一

彌耳敦詩作中に於ける強度熱情の凝塊——古典的精神の豊富と彌耳敦の偉大——此の中核には作者自身の活躍あり——兩者俱に各々

妙所に頼る——兩者の共通一貫せる大主腦

八四

サムソン(四)

腦底恒に一個の彌耳敦——希伯來のサムソンは英國の彌耳敦——自叙傳的鋒鏗——彼れ自身の悲劇の爲め——二十年の惡戰苦闘と一身の廢殘——好題目と最後の熱血——彌耳敦悲劇の發端——彼の自叙傳と英國政教界の豫言書——絶望中にも平和と慰安

八五

晩年の生活

彼の晩年は比較的清福——詩人として生前の盛名——晩年の容貌と生活——彌耳敦傳家の痛風——一日の時間割を有効に使用——飲食物の質素節制

八六

彼の終焉

英國史の出來——拉典文法書と論理書の出版——最後の多忙なる一年——拉典公文書と基督教理論——埋没一百五十年——アリアス派と凡神論者——何等の苦悶なく永眠——遺産分配——尙語るべき者多し

第八章 杜甫以前の支那

八七

獨擅の位置

彌耳敦より杜甫に移轉——杜甫と彌耳敦と位置の相違——杜甫は前に往者なく後に來者なし——同日の論にあらず——杜甫の詩と朱元晦の經書——是れ後人の罪のみ——杜甫に對して競争者なし——支那詩壇に於ける絶特至上の權威——先づ彼の時代を知るを要す

八八

漢と唐

漢人種の雄盛時代——唐と漢——漢人種勢力の消長——漢高と武帝——漢人種の自衛力如何——漢人種の文明と文弱——唐代の文化と西域——武帝と朝鮮統治の實證——西域に於ける三國文明の接觸——文弱の二字は漢人種に對する千古の鐵案

八九

唐太宗

支那歴代君主中の雄者——隋の煬帝と惡政の結果——太宗十八舉義

兵—太宗は偉大なる政治家—絶無僅有の大經世家—漢人種膨脹の一大動機—自ら萬乗の才を以て任ず

九〇 大帝國としての唐……………四〇一

唐の天下と太宗の力—太宗突厥の驕を破る—身を挺して難に衝る—庶幾くは前勳を雪がふ—太宗と外夷の降伏—雪恥酬百王除兇報千古—唐の盛時と威令の普及

九一 則天武后(一)……………四〇五

太宗の情力と其子高宗—支那歷朝女性中特色の一人—則天武后四十六年の專制—女性中の最嗜殺者—所生の愛を犠牲—殺人を以て一種の樂事とす—天下を失はざりしは何ぞ

九二 則天武后(二)……………四〇九

支那人は本來事大主義者—武后と強者の位置—君主權保有の驕略と識度—告密の門を開く—大權を天下の爲に善用す—女中の英主—三者相合して目的を達す

九三 則天武后(三)……………四一三

武后と露國カサリン二世—自ら露國の帝位を踐む—カサリン二世の行政的手腕—彼女の對外政策と雄圖英略—全國に治安を興ふ—李敬業の撤—君德なきも臣節を竭さしむ—内行の醜穢二者—善なる弱者よりも惡なる強者

九四 強者の權……………四一七

支那に於ける人君の天職—君主は牧者人民は群羊—太宗は牧者の賢—支那と強者の權—征服者即ち帝王—強者と專制—強者の權の推移耳—没理想の支那人種と君主の根本的大誤謬

九五 武后より玄宗迄……………四二一

武后の末年と中宗の踐位—中宗皇帝と皇后韋氏—思ひ遣らるゝ中宗の庸闇—睿宗も亦た庸主—女性者の豪傑太平公主—玄宗皇帝と盛唐の稱—唐代の文明と玄宗の半世紀

九六 玄宗皇帝……………四二五

前半の勵精爲治と後半の荒怠放侈—神機迅發と彼の初政—寛大は寧ろ弱點—寛裕の一例—太宗と地を易へしめば如何—姚崇宋璟の二相—自ら治化に酔ひ政治に倦む—通人的資格の濫用

九七 宦官と藩鎮

四二九

帝王の天職と自覺心の不十分—強硬の意志を缺く—唐代の禍機は宦官と藩鎮—支那歷朝と宦官—玄宗の高力士龍用—玄宗と藩鎮の制度—藩鎮は宛然小獨立國主—太宗時代の折衝府—兵農全く分る—國に叛鎮あり鎮に叛兵あり

九八 唐の女禍

四三四

女禍と不思議の因縁—太宗の人倫無視—玄宗自身の女禍更に大也—經驗の忘却—太宗と婦人の印象—皇后王氏を廢す—太眞の入内と玄宗の不倫—玄宗の後半世と晩年の凄凉悲愴—天職の忘却と政治の倦怠

九九 貨と色

四三八

玄宗は支那的理想の人物—富の進歩—玄宗の豪奢天下を失はんとす—惡番頭の李林甫—久しく堪ふる能はず—李林甫の曲事—楊貴妃の寵幸—驕奢の狀—驕奢と文弱—一夫臂を擡へば天下瓦解—所謂宰相と諸將—一身以て國家盛衰の標本たり

一〇〇 漁陽鞞鼓

四四三

玄宗時代の征戰—漢人種は文弱人種—諸將の錚々者は胡人—外人使用は支那の通有—濫寵の極まる所安祿山の謀叛—倉皇蜀に蒙塵—危急の際にも人君の度あり—馬嵬驛の悲劇—大なる戡賊禍の禍

一〇一 肅宗より代宗迄

四四七

肅宗と安祿山—肅宗の即位—回紇の兵を假りて唐朝の再造—宦者李輔國と張皇后—是亦た一個の女妖—肅宗の崩御と張后李輔國の隙—代宗と李輔國—前門の狼と後門の虎—國勢を萎靡不振に陥らしむ

第九章 杜甫の生涯

一〇二 文士の血統……………四五一

杜甫の本傳に到著—彌耳敦以上の主觀的詩人—杜甫の遠祖と祖父—大家杜審言—杜氏の血統には傲慢と慷慨と存す—何處までも自惚漢—杜甫の父杜閑—詩中の自述—杜甫の生誕と一生—詩卷長留天地間

一〇三 處世に拙なる詩人……………四五五

杜甫は早熟兒—世途發程の當初より不幸—處世の術に最も拙—最も李白に攀々—杜甫も下第者の一人—讀書破萬卷下筆如有神—立身の方便を得ず—高く自ら稱道—四十四歳にして漸く一官

一〇四 一官久しからず……………四五九

彼が集中の大文字—許身一何愚竊比獲典契—一幅玄宗晩年の活畫圖—安嶽山の叛旗と彼の歸家—彼の居住と彼の本領—始めての官人的生活—岑參と杜甫—彼の自信と房琯の辯護

一〇五 杜甫と房琯……………四六三

何故に房琯に攀々たる—房琯は氣節の士—房琯と陳陶斜の敗績—房琯の器官と杜甫の諫疏—生涯中の幸福なる生活—宮殿風微燕雀高—明朝有封事數問夜如何—餘りに忠實—華州司功に出さる

一〇六 漂泊的生活……………四六七

地方官として不愉快の生活—九日藍田崔氏莊の七律—詩律の森嚴と氣魄の雄大—彼の棄官—秦州雜詩二十首—彼の殘生と漂泊—我生苦漂蕩何時有終極—生活の窘迫—自ら勞働して糊口す—乾元二年と彼の行役

一〇七 浣花草堂……………四七二

浣花溪寺に寓す—須向山陰上小舟—處々に無心と離塵—草堂成る—古今獨絶の對相七律—貧乏神の道跡と家庭に於ける杜甫—園收芋栗未全實—爲問彭州牧何時救急難—詩朋裴迪を得たり—寛心應是酒遺興莫過詩

一〇八 成都の生活……………四七七

比較的安慰の成都の生活——貧と老と交り相迫る——幾多の交遊——
 嚴武——八歳父の妾を殺す——杜甫と嚴武と同時に貶せらる——杜甫
 と嚴武——大官枉駕の面目——只須伐竹開荒徑——客至從嗔不出迎——
 個人として相待つを望む

一〇九 浪遊二年……………四八一

嚴武長安に還る——甫暫らく綿州に在り後ち梓州に入る——須臾も
 家族を忘れず——依然放浪生活の持續——浣花草堂に眷戀——舍弟に
 草堂を視せしむ——吐蕃入寇代宗遷幸を憤慨す——勿云江漢有垂綸
 ——春風回首仲宣樓

一一〇 再び成都に入る……………四八五

荆南に赴かんとして中止す——殊方又喜故人來——嚴武蜀に再來——
 杜甫も浣花草堂に復歸——鄰里喜我歸沽酒携胡蘆——嚴武の幕に入
 る——相變らず貧乏——嚴武と杜甫との關係は故人的——軍城早秋の
 唱和詩——御客分

一一一 南下雲安に至る……………四八九

東縛剛知己蹉跎效小忠——七個月の在職——嚴武は豪憤漢——傍若無
 人漢の鉢合——甫の傲誕——被酒狂言は上戸の本性——幕府を辭して
 浣花溪上へ——嚴武の死——公來雪山重公去雪山輕——蜀を離れて雲
 安に入る

一一二 詩作豊富の期……………四九四

盡哀知有處爲客恐長休——嚴武死後の蜀——夔州に移る——示獠奴詞
 段——屢々白帝城に上る——詩作豊富の期間——その重なる作——意興
 衰風の微あるを認めず——愈々酣暢老熟

一一三 夔州より湖南……………四九八

夔州の萍遊的生活——田園生活の樂事——尙此土に安著せず——今我
 不樂思岳陽——心は遠く長江の下流に向ふ——遂に夔州を去りて江
 陵に——江陵より公安に移居——實驗より得來る不遇の嘆聲

一一四 最後の杜甫……………五〇二

五律中の白眉岳陽樓の詩——右臂偏枯半耳聾——落花時節又逢君——

彼の死時と死處——彼の爲めに辯ずる者——錢謙益の説——趙翼の説——彼の窮死は事實——愁看直北是長安

第十章 支那詩概観

一一五 詩 經……………五〇七

支那歴代の詩と其の概念——支那上代文化の絶頂たる周と詩經——詩經は支那詩賦の祖——周代の代表的詩歌——悠々蒼天此何人哉——父子恩愛の情——隱退靜修の君子——周初與國の氣運を道破す——北山之什と獻身的精神の稀薄——維仲山甫柔亦不茹剛亦不吐

一一六 周 秦 楚……………五二二

春秋時代と三個の要素——周秦楚——周の文弱と秦楚の勇武——秦の勇武——東洋に於ける羅馬人——韓非子と屈原の離騷——楚は漢人種乎異人種乎——楚人の特色——離騷と作者屈原——政治家的幽愁詩人の面影

一一七 離 騷……………五一六

一一八 漢代の古詩……………五二〇

離騷と楚人的特色——天地無二の作物——離騷の特色——開國の祖先と神話的傳説——詩經と楚辭との對照——山鬼の一節と南國の氣分——矢交臂兮士爭先——七生賦を減するの概あり

一一九 漢代の樂府……………五二四

漢代の樂府と廬江小吏妻——一種の情死文學——一篇の冒頭——非爲織作遲君家婦難爲——却與小姑別淚落連珠子——刑當日勝貴吾獨向黃泉——兩個の情死——眞に千古の奇詩

一二〇 魏初より東晉……………五二八

曹孟德と其の短歌行——對酒當歌人生幾何——出脫三百篇殆盡——治

世能臣亂世好雄の人格活躍——魏末晉初の作家——阮籍と其の詠懐——嵇康の幽憤詩——武氣人を拍つ所以——眞詩亡ぶ

一一二 陶淵明と謝靈運……………五三二

陶淵明と其の詩人たる獨特の位置——彼以前に天然詩人なし——頂天立地無争の位置を占得——謝靈運は詩の製造者——推奨と病所の指摘——山水に對する寫眞師——詩此に到りて入神

一一三 陶淵明の眞面目……………五三六

彼は自然の解釋者——神釋の一首——彼の徹底の本領——隱遁は彼の本志に非ず——少時壯且厲撫劍獨行游——偉大なる詩思と彼の赤心——詩細工人の夢想も及ばず——眼空百世達人大觀

一一四 文選……………五四〇

昭明太子の文選——文選と唐宋時代——文選編述の目的——七代一千餘年の詩文を纂輯——昭明太子と我が聖德太子——批評的眼光と陶淵明集序文——眼識に於て千萬里の差

一一四 詩の形式的進歩……………五四四

佛教の繁昌と感化の無痕跡——梁に於ける木蘭詩——顧爲市鞍馬從此替童征——一家の歡喜知る可し——斛律金の勅勒歌——李太白と周以降詩運の隆替論——詩形と詩式との進歩——音韻學の進歩と齊梁體の出來

一一五 初唐の詩運……………五四八

唐代の詩運と帝王の奨勵——虞世南魏徵及び四傑と四友——近體は唐初に至りて大成す——不自由の聲律中に自由の活動——唐初は六朝繁風の蹈襲——沈佺期の古意——宋之間の扈遊作——王勃の滕王閣——詩の形體に其力を專用せり

一一六 陳子昂……………五五二

開元以前の代表的詩人——如何にして高名——獄中の憤死と子昂の志——唐詩品彙著者の評言——感遇の詩三十八首——一劍報國の功名心——是れ一個の大議論——懷古の絕唱——語短意長——新意あり生氣

第十一章 杜甫と李白

一二七 李杜の優劣……………五五七

大詩人を生ずべき最好の氣運—李杜の優劣如何—諸家の李杜優劣評—元稹の評—白居易と韓愈との評—後人の多數は杜甫を正宗とす—乾隆帝の唐宋詩醇に於ける李杜評—李杜を以て殊途同歸とするは當らず

一二八 李杜の異同……………五六二

その本領特色を闡明して而して李杜の位置を指定せよ—李杜は其の性情、精神、思想及び詩其物に於て方向を殊にす—その異同を概括的に一言—李白の閱歴と特質—趙翼の所説—舊衣を纏ふに新想を以てす

一二九 李白の本領(一)……………五六六

李白の本領と其の古風五十九首—南方哲學の眞粹—自ら神仙たらんことを求む—牛仙牛俠の迷途—李白は天成大詩人—思想の飄然不群は白の獨歩—復古派と守舊派—儒教に對して冷眼—一棒撲殺

一三〇 李白の本領(二)……………五七〇

離騷に擬したるの痕跡斑々—關山月—子夜吳歌—烏夜啼—行路難—扶風豪士歌—襄陽歌—把酒問月—李白と近體—太原早秋と金陵鳳凰臺—絶句は第一位—李杜は其出身に於ても殊れり

一三一 李杜相互の推許……………五七五

兩人互の立脚地を覺悟す—兩人は全く別世界の動物—杜甫の李白を憶ふの句—李白に傾倒したる所以—李白は十三歳の先輩—社會的に於ても先輩—吾人は杜甫の樹立を嘆美す

一三二 杜甫の後代に及ぼせし感化……………五七九

杜甫出で、支那の詩界亡ぶ—杜甫以來の作家—到底杜甫の双翼

より離れず—李白の大宗師たる能はざる所以—一切の詩形悉く
杜甫を典型となす—彼の大家下より離るゝ能はざらしむ

一三三 何故に詩界の巨人たる乎……………五八三

問題の窮極は何故に巨人—嚴滄溟と秦淮海の評言—新唐書本傳
の贊—趙翼の進歩的評言—乾隆帝の評言—漸く杜甫の眞面目
に接觸—杜甫を藉りて詩教を布く

一三四 其の重なる理由……………五八七

理由は單一ならず—孔夫子教義の代表者と政治的詩人—立身の
主義に於て確實鞏固—白樂天—蘇東坡—同情の博大深厚と普遍
充實—政治歴史人物の方面に詩境を開拓せり—詩の形式に對す
る新工夫—前代の精神を集めて大成—詩人的天分の雄深博厚—
詩人として一生を終始—本領發揮の最好時代に遭逢せり

第十二章 杜甫詩概観

一三五 北 征(一)……………五九三

代表的作物の隨『北征』—起得堂々—鳳翔縣發途の光景—緩急相
濟ふの文法—造句の簡妙を極む—自在の廻轉と作者の金剛力—
家庭的情趣の濃厚—忠孝の二途ならざる彼に於て見る

一三六 北 征(二)……………五九七

彼の歸家と家庭の情態—一家の經營よりも國家の經營—猛烈至
尊の身上に想著—隱憂存す—彼が軍事上の意見—語々尋酌字々
權衡—煌々太宗業樹立固宏達—北征の一詩と彼の海函地頁の才
力—韓愈の南山

一三七 洗 兵 馬……………六〇二

杜甫獨り最も勤王の精神に饒む—標本として洗兵馬—發端に妙
—常思仙仗過崆峒—整頓乾坤濟時了—頌中寓規の深意—皇室中
心主義の唱說—張公一生江海客—詞人解撰河清頌—田園の光景
題視—忠孝主義の活宣傳

一三八 諸將五首……………六〇七

諸將五首に就て一瞥——杜甫の七律は古今の壯觀——解嚴安枕の秋に非ざるを痛論す——紙上股々忠憤の聲を聽く——滄海未全歸禹貢——只在忠良翊聖朝——安危須仗出群才——乾隆帝の諸將五首評——彼は勤王的經綸家

一三九

絶句十二首

絶句十二首と勤王詩人の眞面目——絶句に於ても自己の進路——五十六歳頃の作——猶不定——今王是——王室正——遣人猜——盡正臣——小一身——白首耶——一百州——氣共和——双闕舞——赤心存——多戰場——浦二田の評は不易の言

一四〇

哀王孫

更に時事感詠の詩人——哀王孫と作者の境涯——長安城頭頭白鳥——腰下寶玦青珊瑚——豺狼在邑龍在野——昔何勇銳今何愚——竊聞天子已傳位——哀哉王孫慎勿疎——忠臣の盛心倉卒の隱語情態を備盡す——作者忠愛の至情

一四一

哀江頭

彼の中期に於ける標本の一——哀江頭は杜甫の長恨歌——筆力の轉捩矯健眞に比なし——鏡花水月の妙——如何なる場合にも寛厚の同情心——人生有情淚霑臆——天衣無縫——白樂天の長恨歌——一杜甫と百の樂天——蘇子由の評言——相違は詩腸の冷熱

一四二

三吏、三別(一)

又た庶民の同情者——三吏、三別は詩的實錄——『新安吏』——嗚呼情けなや此の天地——郭子儀軍の現状——勤王家也愛國者也——『潼關吏』——胡來但自守——哥舒翰の失敗を再びする勿れの警告

一四三

三吏、三別(二)

『石壕吏』の波瀾曲折——暴吏虎よりも猛し——子役したる三人の子——惟有乳下孫——猶得備晨炊——如聞泣幽咽——人をして暗涙に咽べしむ——『新婚別』の冒頭——妾身未分明何以拜姑嫜——婦人在軍中兵氣恐不揚——人事多錯逆與君永相望——不朽の詩人たる價值

一四四

三吏、三別(三)

『垂老別』を見よ——一人山田守る老翁亦た微發せらる——是れ新婚別に對する舊婚別——人生有離合豈擇喪盛端——棄絕蓬室居場然摧肺肝——『無家別』は一層の悲劇——浦島太郎の歸郷と一般——人家一變して狐狸の窟——近行止一身遠去終轉迷——永痛長病母五年委溝谿——上は國難を憫ひ下は民窮を痛む——杜甫の同情心は廣大無邊也

一四五

羌村三首

六四二

簡潔精妙の羌村三首——靜燥赤雲四日脚下平地——妻孥怪我在驚定還拭淚——嬌兒不離膝長我復却去——蕭々北風勁寒事煎百慮——驅鷄上樹木始聞叩柴荆——手中各有携傾榼濁復清——請爲父老歌——驪師を假らず天真を吐く陶詩と氣息相通ず

一四六

有感五首

六四七

國家の經綸に就ても多少の見解あり——有感五首は一篇經世の大文字——至今勞聖主何以報皇天——諸侯春不貢使者日相望——落下舟車入天下貢賦均——不通行偷德盜賊本王臣——丹桂風霜急青梧日夜凋——終依古封建豈獨聽蕭韶——願聞哀痛詔端拱問瘡痍——儒教的詩

人の代表者

一四七

詠懷古跡五首

六五一

以古見今以今見古——是れ作者の自叙——風流儒雅亦吾師——生長明妃尙有村——詠王昭君中の絶唱——劉玄德の同情者——諸葛孔明の嘆美者——七律中の三位一體

一四八

秋興八首(一)

六五五

杜甫の詩と秋興八首——天外の三峰此詩を中心とす——三詠の作意と作者の立場——性靈的に杜甫を閑却せざれ——八節に區分せられたる一大長篇——詩の誦者と解者——秋興八首と作者の眞意

一四九

秋興八首(二)

六五九

起頭に最も力を用ふ——玉露凋傷楓樹林巫山巫峽氣蕭森——夔府孤城落日斜每依北斗望京華——千家山郭靜朝暉日々江樓坐翠微——聞道長安似奕棋百年世事不勝悲——蓬萊宮闕對南山承露金壺霄漢間——聖唐峽口曲江頭萬里風煙接素秋——昆明池水漢時功武帝旌旗在

眼中——昆吾御宿自逶迤
驚閣峰陰入漢陂——格調爾かく嚴密にして
此の大自然力を有せり

第十三章 詩人としての本領

一五〇 家庭的詩人……………六六五

君國的詩人たると同時に又家庭的詩人也——家庭的情味の横溢——
傳神の筆——一家和樂の情活躍——烽火連三月家書抵萬金——驥子好
男兒——汝啼吾手戰吾笑汝身長——其愛妻子より弟妹に及ぶ

一五一 人事的詩人……………六六九

徹上徹下人事的詩人——人間以外の生物にも同情——與人一心成大
功——萬里方看汗流血——何由却出橫門道——所向無空闊眞堪托死生
——曹將軍の來歴——聲譽一世を傾倒す——本題より更に一關を排し
去る——一篇畫馬の詩は是れ時事感傷の作

一五二 天然と人事……………六七三

天然と人事の背景——炯眼に匹敵する偉大の用語——葉夢得の評言
——彼の擅場は大筆淋漓一掃的の描寫——乍ら人事化——旅夜書懷の
作——登慈恩寺塔の五古——造化を驅使するの筆力——錢牧齋の箋解
——曲江對雨の七律——眞に花濺淚鳥驚心の詩人

一五三 豫言者的詩人……………六七八

時代と詩人の位地——杜甫と投贈の詩——自ら居る甚だ高——詩に向
て無二の誠意——得失寸心知——語不驚人死不休——新詩改罷自長吟
——實際中より得來りたる消息——未掣鯨魚碧海中——千古一人たる
自覺と豫言者的詩人

一五四 祖述的詩人……………六八二

資料は前人に負ふ——經典言句の襲用——前人詩句の採取——其例多
し——渾涵汪茫千變萬狀古今を兼有す——王彥輔の評言——詩人の血
脈を以て自負——詩人杜甫獨自一己の印象や大也

一五五 掩有衆長……………六八六

衆長兼備群美具濟——孫僮と吳齊賢との評言——衆長兼備と彼の人事的詩人たる本領——錢謙益の一隻眼評——而も未だ大本領を看取せず——凡ての評者彼が一大特色を閉却す

一五六 大醇大疵……………六九〇

寧ろ大醇にして大疵——急激なる詩界の革命者——前人未踏地開拓に伴ふ病處——結二句微弱——闇夜の七律——登樓の七律——上兜率寺の五律——八哀と戲題郝使君兄の作——寧ろ集中より抹殺せん乎

一五七 本色の詩(一)……………六九四

善く杜詩を讀むは頗る難し——後出塞中の第二首は完璧——精神全篇に充溢す——長篇として兵車行短篇として貧交行——兵車行——主意を點破し來る——慷慨已む能はず——收め得て駭魂驚魄——貧交行——眞成の美は素樸の中に存す

一五八 本色の詩(二)……………六九八

杜詩の現在數——收京中の第三首は完璧——秦州雜詩中の佳作——送

遠——登岳陽樓——吹笛——返照——五言排律——風塵三尺劍社稷一戎衣——五七絶句の佳什——古今に雄視し百代に獨歩する所以

一五九 奇關獨造(一)……………七〇三

奇關獨造と大眼識大手腕——特色ならざる詩——一氣流注轉折自在——飲中八仙歌——銜杯樂聖稱避賢——皎如玉樹臨風前——自稱臣是酒中仙——揮毫落紙如雲烟——一韵到底にして八人の合傳——技巧超凡の證明

一六〇 奇關獨造(二)……………七〇八

文字の驅使語格の適用は千古の一人——射人先射馬擒賊先擒王——在山泉水清出山泉水濁——語法句法の妙域——七律中の佳句——皆是歌ふ可く哭す可く冥想す可く長嘯す可し——靈蓋の別——何人も一字を著け得ず——字法に超越せる例——双字疊用の妙——見出さざるは諧謔の分子

第十四章 杜甫と彌耳敦

一六一 百尺樓上の位置……………七二三

結論として前文の意義約説——全く没交渉なる兩個の人間——第三者たる吾人より見て——彼等は各詞客としての立脚地を自覺せり——高志篤行なきは古今文人の通弊——詩人の天職は人類最崇の一詩を作らんが爲めに生活せり

一六二 彼等の自負心……………七一七

人間三重の自負心と杜彌兩人——君國及上帝に奉仕せんが爲めの生活——自負心と他の反撥——高遠なる理想の爲に貢獻せんとす——杜甫の志——彌耳敦の志——其過を見て其仁を知る

一六三 政治的臭味……………七二二

兩人の自覺と自信と自負——兩人理想の趨向を殊にす——國家を廣大なる意義に於て考察——彌耳敦の崇拜したる自由——杜甫の政治的主義と經綸——徹頭徹尾政治的なるに於て同一——兩人の特色は政治的詩人たるに在り

一六四 短歌と絶句……………七二六

詩題と人生の一大表現たる政治——兩人の詩と政治的色彩——彌耳敦と政界奮闘の期節——彌耳敦の短歌と杜甫の絶句——彌耳敦が議院軍の總督に與へし短詩——短歌と絶句とに現れたる兩人の力量——パチソンの評言——眞に異代の兄弟

一六五 婦人の貞操……………七三一

文人詞客と薄倖子——彼等は雲鷲の清唳——杜甫の時代と婦人の貞操——佳人の五古一篇——貞操に就て深甚高大の旨趣を持せり——覽神の曲と婦人の貞操——兩人貞操問題意見の一致——不朽の詩人たる所以の要素

一六六 彼等の人生觀……………七三六

彼等の人生に對する態度は嚴肅——彌耳敦人生觀の吟味——泰然自若苦境を經——青春の誘惑を衝破して清淨を把持したる子女の頌——光明的心地終始渝らず——國民的健全の豫言者——杜甫集中の除

外例——實在以外に何物も識認せず——其缺點も共通したり

一六七 感 激 性……………七四一

大詩人と感激性——彌耳敦の半面は感激を以て始終せり——感情の化身——美を愛して淫せず——情根の最美最潔の表現——徹底的意志と感激性動力——大詩人の資格と意志及び情火——兩人を聯想す

一六八 性格の異同……………七四六

杜甫は他と怡悦するの性情を有せり——今夕復何夕共此燈燭光——夜雨剪春韭新炊間黃粱——感受性の鋭敏——彌耳敦と怡悦の性情——ローレンスに與へたる短歌の一節——冷熱靜躁の差はあり——兩人と交道の相違——兩人性格の異同と與に又詩格の異同

一六九 硬化不硬化……………七五一

杜甫の心腸遂に硬化せず——春海の如き彌耳敦の少壯時代——結婚の失敗は彼が心腸の一大破産——如何に硬化しても到底詩人——大作を成就したる所以の二大要素——屢す可き乎屢す可き乎——愛の

破産者と杜甫の幸福

一七〇 盲目と肺患……………七五五

健康状態と精神の支配——彌耳敦の健康——失明と心理状態の大變化——失樂園第三卷中の一節——肉眼を盲して心眼を發す——政治的失聲と失明の効果——廣大無邊の空間を想像し得——杜甫は中年以來の肺患者——老病有孤舟の深意義

一七一 人 と 神……………七六〇

彌耳敦は神を讚美するに急なりし——杜甫は多く人間に接觸したり——兩人の英雄崇拜の對象——兩人の同情心の性質——杜甫の同情と禽獸——功成失所往用舍何其賢——杜甫は儒教的詩人彌耳敦は清教徒的詩人

一七二 政治と宗教……………七六四

意見の宣傳者たるに於て——神の攝理と日常の人事——宗教的信仰に於て分離し政治的態度に於て一致せり——彌耳敦と政治宗教

の双方面——彼が詩の異彩——彌耳敦の風采と杜甫の自信——彌耳敦は神に訴へ杜甫は人に訴ふ——未だ軒輊を見ず

一七三

人格と格調……………七六八

兩人とも崇大なる格調の持主——杜甫の瑕瑜百出——セーレルの失樂園評——格調は人格也——アルツクの評言——大技巧と大品性——崇高なる人物にも缺點——詞客と一種の性僻

一七四

人格の異同……………七七二

彌耳敦は垂直に高く杜甫は水平に廣し——アノルドの彌耳敦論——純潔と親切とは基督教の双翼——彌耳敦は純潔杜甫は親切——彌耳敦の詩は偉大なる音楽——テニソンの讚評——彌耳敦の手は天巧に近し——杜甫は人情詩人として古今希有の一人

一七五

作物と作者……………七七六

兩人は愈窮愈工——彼等の生活は有意義——彌耳敦の理想と杜甫の理想——彼等の一生は與へんが爲め——天使に對する神宣——彌耳敦

杜甫と彌耳敦年表

- 其一 彌耳敦……………一四
- 其二 杜甫……………一五……三四

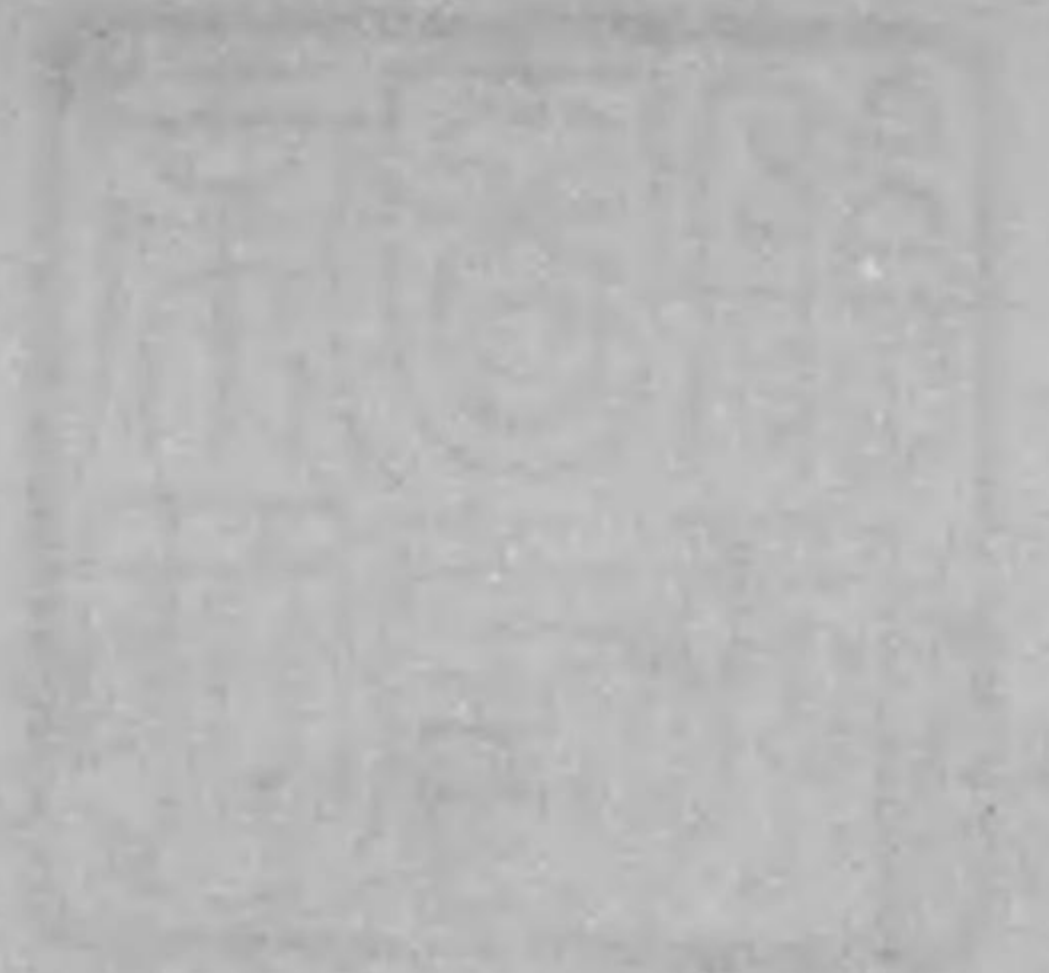
と自信の權化——杜甫抱負亦大——杜甫の忠厚の心地と兼濟の志——兩人各一身を小とし天下を大とす——眞成の大文豪と大人物

杜甫と彌耳敦挿畫目次

- 一 彌耳敦肖像 [本文 新聞記者の詩人論]……………一
- 一 彌耳敦十歳時の肖像 [本文 幼年の教養]……………五七
- 一 彌耳敦の眞蹟 [本文 一片の暗黒史]……………二九七
- 一 失樂園初版標題 [本文 大作成就]……………三〇七
- 一 失樂園再版標題 [本文 失樂園解題(一)]……………三二七
- 一 京都詩仙堂所掲の杜甫像 [本文 文士の血統]……………四五一
- 一 成都城外杜公祠圖 (高島北海畫) [本文 成都の生活]……………四七七
- 一 杜甫戴笠の像 (平福百穂畫) [本文 李杜相互の推許]……………五七七
- 一 元板杜工部詩集影寫 [本文 豫言者の詩人]……………六七九



彌耳敦肖像

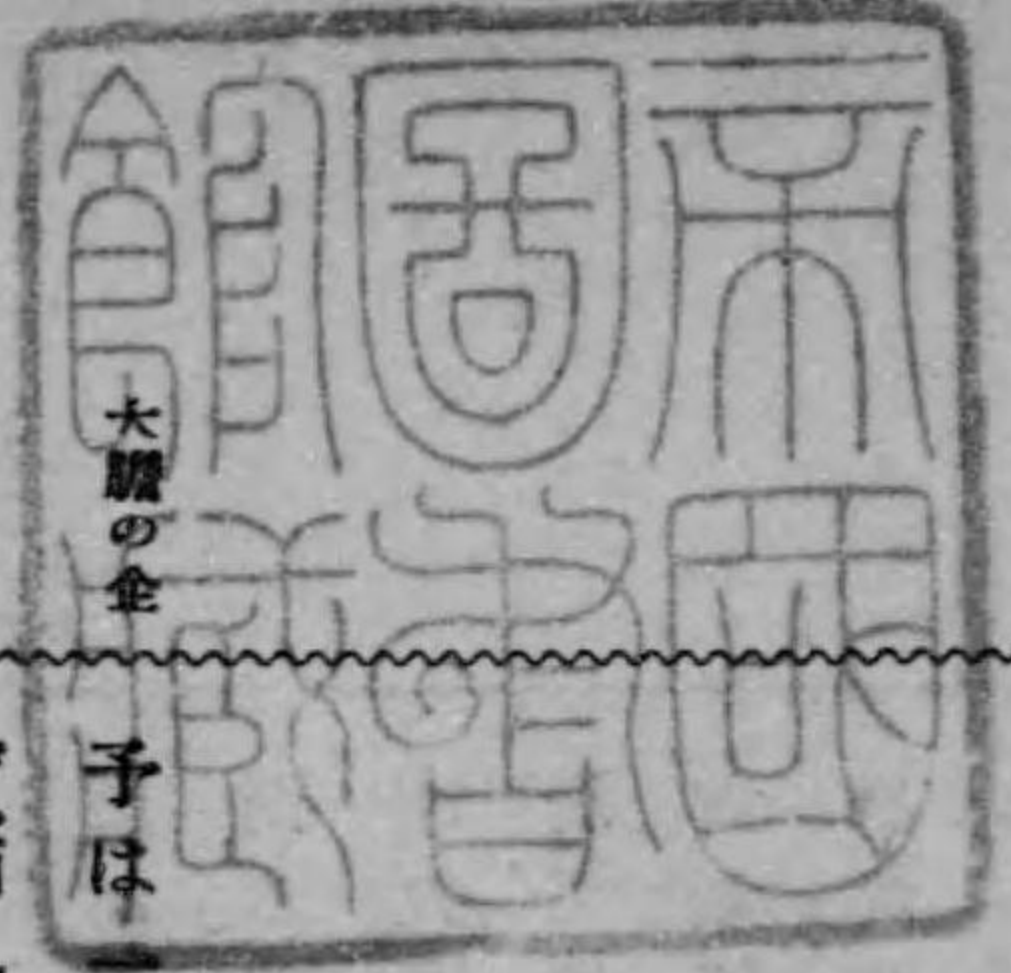


杜甫と彌耳敦

蘇峰學人

第一章 總論

一 新聞記者の詩人論



予は個の新聞記者のみ所謂る政治家たらざる如く、又た所謂る文士にあらず。而して古今専門の學者が精力を傾倒して、殆んど研究し盡し、解釋し盡し、批評し盡し、評論し盡し、他の素人として、何等の新光を發射するの見込なき、東西の詩傑たる杜甫と、彌耳敦とに就て、語らんと試みるが如きは、是豈に盲者蛇を

第一章 一 新聞記者の詩人論

怖れざるの類にあらざるなき乎。知らず何等の抱負ありて、斯る大膽なる事を企てたる乎。

興趣禁ずる能はざるが爲め
記者をして率直に白状せしめよ。記者は實に半點の新奇なる發見を、此の題目に向て誇る能はざる也。惟ふに記者の辿らんとする道路は、既に前人の踏藉したる熟路ならむ。偶々自から獨得の見解ありと詫するも、そは恐らくは遼東の豕たらずんば、あらざるに斯く或る意味に於ては、陳套問題たり、他の意味に於ては、難問題たり。而して現在の社會に最も縁遠き、外題を掲げ來り、世上の好尚如何に頓著せずして、猶ほ之を敢てしたる所以は何ぞや。蓋し記者自からの興趣、禁ずる能はざるものあれば也。即ち見物人に觀せしめんが爲めに舞ふに、あらず、自から舞はんが爲めに舞ふのみ。然らば則ち何故に、此の如く興趣を中に湧かしめたる乎。吾人は白狀の序でに、此にも言及するの容恕を、我か寛大なる讀者に請はざるを得ず。

著者と杜少陵

記者は支那の文學に於ては、杜少陵を唯一の本尊とせざる迄も、少くとも其の

杜工部集

一と做せり。彼が蜀相の七律は、記者未だ十歳に滿たざるの頃、吾父より口から誦授せられたりし也。『出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟』の二句は、四十餘年來、忘れんと欲して忘るゝ能はざる護符也。

吾父の藏したる杜工部集は、横井小楠先生の吾父に貽られたるものにして、記者が十五六歳の交、同志社在學の際、私に之を座右に供へたり。此書現に逗子老龍庵に藏す。予豈に悉く杜甫の詩を解し得たりと云はん乎。又た悉く彼の詩を愛すと云はん乎。唯た彼に於て、聊か解し得たりと信ずると同時に、彼に於て頗る愛す可き點あるを覺えたるのみ。

著者と彌耳敦

若夫れ彌耳敦は、明治十三年、マコレの彌耳敦論によりて紹介せられたるに過ぎず。但た其の紹介者の雄文、快筆に愛著したるの餘、更らに其の主題者たる彼に對する、欽慕の情を熾ならしめ、遂に彼の詩集と相見るに到らしめたり。予が當時に於る英語の知識にては、彼の詩を欣賞するには、餘りに不充分なりしは勿論なりしも、然も人心に共通する神智靈覺は、其の半知半解の裡にも、尙ほ

若干の愉快を、我に齎らし來れり。例せば『失樂園』の第二卷に於ける大魔王が、其の失墜したる天國を、恢復せんとする大評定の如き、當時の未熟なる予をして、天地間斯の如き雄奇の文字あるかと、驚嘆せしめたりし也。例せば、彼か二十三歳自述の短歌を誦して、自個の年齢が作者に近きを自覺し、作者の感慨を、恰も我が感慨に同化せしめたりし也。

當時記者は、熊本城の東郊に村塾を設け、授徒自修に餘念なく、偶々業畢り神疲るれば、單り彌耳敦詩集を携へ、白川枝流に沿うたる小丘、老楓溪を掩ふ村祠の畔に遊び、時に卷を披き、時に冥想に耽り、暮色蒼然、詫摩の平原に滿ち、阿蘇山の烟影、復た辨ず可らざるに到り、始めて己に反りて、歸路に就きたる、幾回なるを知らざりし也。

此の如くして、杜甫と彌耳敦とは、我が三十餘年、否な四十年に垂んとするの耐久朋也。予は彼等の集に接する毎に、萬感攢集するを禁ずる能はず。而して幾回か此の東西の兩詩傑を、太史公が屈原、賈生の合傳を作りたる如く、ブルターク

彌耳敦詩集を誦す

杜甫と彌耳敦の

のシセロ、デモステネスの合評を作りたる如く、其の對照評論を試み、東西幾千里、古今幾百年を隔て、遂に相契るの機縁なかりし、此の兩詩傑をして、我が机案の邊に臂を把りて、其の議論を上下せしむるの快を見んと思ひたりし也。而して遂に果さざりし所以は、其の題目の餘りに重大にして、記者自から其人にあらざるを疑惧したれば也。

然も歲月馳するが如く、志望は償ひ易からず。予は今や齡半百歳を過ぎ、英國の盲詩人が、失樂園の大作を成就したる齡に比して、僅かに二歳を剩まし、支那の窮詩人が、其の瘦骨を詩卷と與に、天地に残したる齡に比して、五歳を剩すのみ。今にして之を果さずんば、或はその機會なからんことを恐る。是れ自から揣らず、敢て藝進する所以也。

予が千言萬語、要するに前收穫者の餘穂を拾ふに過ぎざるべし。但だ兩詩人の比較評論に於て、聊か少しく此の問題に、寄與する所あらんとを期す。然も予は到底一個の新聞記者也。所謂純文學の如きは、記者の企て及ぶ所にあらず。

白から藝進する所

今人に向て時示獻照を實獻

のみならず、又た企て及ばんと欲する所にもあらず、新聞記者をして、現代より超越せしめんとするは、猶ほ魚をして波上に飛ばしめんとするが如し、吾人が古人を尙友するもの、亦た焉んぞ今人に向て、何等の暗示、默照を貢献する所以たらざるなきを知らん哉。

二 詩とは何ぞや

詩の定義
と解の
危険の

若し輕心に詩の定義を下さんとする乎、是れ目を縛して、千里の藪に飛び入る也。吾人が骨折る丈、それ丈、却て荆棘の重圍に陥るに過ぎず。蓋し詩の定義たるや、古今東西の文人、批評家が紛々聚訟して、遂に未だ其の要領を得ざる所也。但た吾人は自から此の危険を回避するが爲に併せて詩の概念を得るとをも、回避す可き理由なき也。

詩は人類
最初の
記録

惟ふに人類の記録としては、詩は全く最初と云ふ能はざるも、少くとも文化の初歩に出現したる産物也。人類原始生活の記録たる、洞穴中に彫刻せられたる繪畫、若くは貝塚中より發掘せらるゝ石器等は、始らく措き、凡そ民族歴史の曙光と與に出現するもの、概ね詩たらずんばあらず。我が神代に於ける素盞鳴尊の「八雲たつ出雲八重垣」の歌に於ける、支那の虞舜の「股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉」の歌の如き、若くは希臘に於ける法馬ホーマの詩の如き、印度の「ウエダ」

詩と人類
生活との
關係

の如き、何れも皆な然らざるはなき也。假令是等の作の或者が、後人の假託に出
 でたりとするも、少くとも其の本原は此に溯らざればならず。
 要するに、詩の散文よりも先きに出現したるは、世界各國の歴史に徴して、争ふ
 可らざる事實也。而して此詩が、人類の生活と須臾も離れ難き至緊至重の關係
 を有するも、亦た事實也。諺に「詩を作るよりも、田を作れ」と云へり。されど詩の
 精神的食糧として、必須要件たるは、猶ほ米の肉體的食糧として、必須要件たる
 が如し。人類生活の上より打算し來れば、彼此容易に輕重す可きにあらず。
 若夫れ詩の定義を下す者の、動もすれば陥り易き迷徑は、其の形式と内容とを
 混同するが爲めならず。詩とは何ぞや、形式論者は曰く、韻語也、即ち
 無韻語たる散文に對して云ふ也。されど散文の想像力の高調したるものを指
 して、無韻の詩と云ひ、繪畫の人の感情を刺激するものを、無聲の詩と云ふ。或は
 風光の絶佳なるを、詩境と云ひ、雄辯の人を魅するを、詩興と云ふ。若し韻語にあ
 らざれば、詩と稱す可らずとせば、如上の用語は、悉く誤謬と云はざる可らず。是

詩の形式
と内容と
の混同

二者與に
是に於て
非又た與に

れ蓋し、前者は詩を形式の上より見、後者は詩を内容の上より見たるが爲めの
 差異のみ。

吾人の所見に於ては、二者與に是にして、又た與に非なりと云はずんばならず。
 蓋し聲調、音韻は、詩を形成する必須要件也。されど此れのみにて詩と云ふ可ら
 ず。必ず其の内容に於て、人の性情を怡悦せしめ、人の快感を興催せしむるもの
 を、具備するものたらざる可らず。吾人は此の意味に於て、形式論に於て、詩が散
 文と相對するが如く、詩が内容論に於て、科學と相對するものたるを、識認せざ
 らんとするも能はず。乃ち科學者が其の基礎を實證に措き、其の方式を論理に
 取るに反し、詩人は其の基礎を人心に措き、其の方式を想像に取りたるものと
 爲す也。

古今集の
序文

斯く觀じ來れば、紀貫之が、古今集の序文に於て、「大和歌は、人の心を種として、
 萬の言の葉とぞなれりける」と云ひしは、聊か其の正鵠を得たるに庶幾し。而
 して西哲が詩を目して、「熱狂せる眞理」と云ひ、若しくはマシウ・ア・ノル

ドか、「人生の批評」と云ひしが如き、未だ全く盡さざるも、稍々其の一端を得たるが如し、舜典に曰く、「詩言志、歌永言」と、永は詠なる可し、毛詩の序に曰く、「詩者、志之所之也、在心爲志、發言爲詩」と、文心彫龍に曰く、「詩者、持也、持、人性情」と、是れ亦た詩の本旨を、幾分か道破し得たるに似たり。

アリストテレスの詩の本旨

秦西學問の父とも稱す可きアリストテレスは、詩の本旨を論じて曰く、「詩の本旨は、(第一)他の一切の美術と同じく、模倣にありて教訓にあらず、(第二)模倣の目的は、區分的ならずして、普遍的ならざる可らず、(第三)而して其の模倣の正しきを得たるや否やは、作者自ら其作を悦ぶのみならず、社會が其作に對して、永久の愉快を享受するや否やによりて、判定せらる可し」と。

模倣より寧ろ表現

惟ふに模倣とは、寫真師が種板に、物體の影子を捕ふるの類にあらずして、詩人の心眼に、萬有を映じて、之を寫し出すものならむ。人生の恩愛、離苦、喜怒、哀樂の如きも、其の醜惡なる部分を淘汰し、詩人の詩胸によりて、之を蒸溜し、之を吐き出すものならむ。果して然らば、之を模倣と云はんよりも、寧ろ表現と云ふを以

人類に永
久なる慰
安の靈藥

て、其の意義を明瞭ならしむるものにあらずや。

若夫れ區分的ならずして、普遍的ならざる可らずと云ふは、萬有に貫通する根柢原理に接觸するを、意味したるものにして、則ち眞成の詩は、時間、空間の上に超越して、人類の共有物たらざる可らざる所以を、指點したるものとして、解釋せん乎。是れ亦た吾人の所見と、大差なき也。而して其の必然の結果が、最後の要件たる、人類の永久なる慰安の靈藥たるや、論なきのみ。

果して然らば、本文の記者をして、我が大正年間の日本國民と、何等の干係なき杜甫と彌耳敦とに、深甚なる興趣を感せしめ、之を論評するに到らしめたる所以も、亦た東西の兩詩傑が、如上の三個の要件に、恰當したるが爲ならずして何ぞや。

三 神と人との合の子

詩人とは
何ぞや

詩人とは何ぞや。詩を作る者は是れ也。「花に啼く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生とし活けるもの、孰れか歌を詠まざりける」との言を、其儘に受取れば、凡そ人たるものは、何人たりとも詩人たり、又た詩人たるを得可きが如し。然もそは唯だ、總ての人に詩情の存在するを認めたる迄にして、詩人は單に一片の詩情のみにて、出で来る可きにあらず。彼は詩情の結晶體たらざる可らず。彼は造化を皮相的に模倣するのみならず、更らに之を性靈的に表現せざる可らず。即ち自然の忠實なる寫真技手たるを、甘せずして、自然を美化し、善化し、妙化せざる可らず。詩人は自然の奴隸にあらずして、其の友人たり、或は其の主人たらざる可らず。詩人は自然の中に住せずして、自然よりも、より美なる詩境に住せざる可らず。即ち詩人の天職は、寫すに止まらず、現はすに止まらず、更に創造せざる可らず。寫と現との絶頂は、實に創造に達せずんば止まざれば也。蓋し自然の足ら

隨時隨處
詩世界の
創造詩人は成
長したる
もの

ざる所、詩人之を補はざるを得ざれば也。アリストテレスが、詩の超卓なる所以を以て、之をより高き眞理と、より高き眞面目に歸したるは、聊か這般の消息に通じたるの言に庶幾し。

今夫れ詩人の、天上の星に達する崇高なる美眼と、地球をも溶解せんとする熱烈なる性情とは、宛も白雪が、人間一切の濁界、穢土を、白玉的清淨郷たらしむる如く、隨時隨處、千億の詩世界を創造せずんばあらず。蓋し科學者は、汽車の如く、唯だ軌道の上のみを駛るも、詩人は航空機の如く、空中を隨意に飛行する也。總ての人良心を有するが故に、皆な聖人たるを得可しとは、是れ月並的道學先生の訓言也。總ての者詩情あるが故に、皆な詩人たるを得可しとは、是れ唯だ理窟攻の文句のみ事實に於ては、固より然る能はず。此に於てか詩人は製造したる者にあらず、成長したるものなりとの、汎論は出で来る也。即ち詩人は、本來詩人たる可き本能を具備して、先天的に出生したるものにして、決して何人たりとも、本日より詩人たる可く心掛けて、直ちに詩人となり得るものにあらずと、

詩人の一
半は人造

杜甫と彌耳敦
云ふの意味也。

吾人も大體に於て、此論に賛同するを辭せず。されど詩人は先天的なるが故に、單に此れにて足れりと云ふは、大なる僻見也。大なる詩人は、生れながらの詩人にあらず。彼等は、大詩人たる素質を、先天的に有すると與に、大詩人たる素養を、後天的に有せざる可らず。此の意味に於ては、詩人の一半は、人造と云ふも、亦た妨げなかる可し。

造化の兒
亦た人間

唐の時代には、幾千百の人間あり。然るに何故に一人の杜甫ありて、他の杜甫なき乎。英國十七世紀の中期には、幾千百の人間あり。然るに何故に一人の彌耳敦ありて、他の彌耳敦なき乎。是れ實に不可解の事實也。斯く觀じ來れば、彼等は直ちに造化の兒と云ふも可也。然も阿非利加の沙漠には、彌耳敦生せず。臺灣の蠻界には、杜甫を出さず。彼等をして世界の詩人たらしめたるは、固より彼等の屬する人種、彼等の出生したる時代、彼等の接觸したる境遇等に、負ふ所多なることも、亦た看過す可らず。此に於てか、彼等は亦た人間の兒たりと云ふも、不

詩人は自
然と人間の
子の合の

可なき也。

要するに詩人は、自然と人間との合の子也。彼等は其の一半は、造化に屬し、他の一半は、人間に屬す。彼等を全く人間と見れば、尋常人間の見るを得ざるものを見、聽くを得ざるものを聽き、感ずるを得ざるものを感じ、されど全く人間ならずと見れば、其の喜怒哀樂、一として人間ならざるはなく、唯だ尋常人に比して、其の調子を高め、其の熱度を加へたるのみ。此に於てか、ソクラテスが、詩的インスピレーションは、一種の發狂なりとの警句の、頗る意義あるを覺えずんばあらず。蓋し狂漢必ずしも詩人たらず。然も詩人たらんと欲せば、常住狂漢たらざる迄も、詩的發作の刹那は、自から一種の狂漢化せざらんとするも、能はざる也。即ち詩人は、彼自身先づ詩たらざる可らざる也。

四 詩人の戸籍帳

普遍的に
萬有な表に
現

如何に喝采を博し、人氣に投ずるも、唯た其の時節、其の場所限りにして、忽ちに忘却せられ、殊に異りたる場所、隔りたる時代には、何等の快興、好感をも與へざる作は、是れ唯だ俚謠と一般のみ、決して之を詩と云ふ可らず。此の如き作者には、詩人の名は、餘りに高尚過ぎる也。此に於てか、アリストテレスが、萬有を模倣するに於て、區分的ならずして、普遍的ならざる可らずと云ひし言の、頗る適切なるを覺ゆ。即ち吾人が詩人の時間、空間に超越して、人類に共通し、萬有を一貫する、根本旨義に接觸せざる可らずと云ひしも、亦た如上の理由に基く也。然りと雖も、是れ唯だ極致に就て云ふのみ。若し然るが故に、詩人は其の圍繞せらるゝ社會にも、其の周旋する時代にも、没交渉たらざる可らずと云はゞ、是れ詩人をして無味、無色の仙骨たらしめよと云ふのみ。釋迦の教を奉ずる者、豈に止だ當時の印度人のみならん哉。孔子の道を尊信する者、豈に止だ當時の支那

社會と
時代にも
接觸孔子も
釋迦も
皆然り

人のみならん哉。彼等は實に世界的大哲人にして、萬世の標準也。されど彼等が印度人、支那人たるに於て、妨げなきのみならず、眞に彼等を知らんと欲せば、彼等の種族、彼等の時代、彼等の境遇をも、併せ稽へざる可らざる必要ある也。乃ち基督の如き、神の子と稱するにせよ、人の子と稱するにせよ、其の性格には、争ふ可らざる猶太人の痕跡あり。其の閱歷中には、羅馬統一時代の東方的色彩あり。基督を稱して、猶太人のみなりと云はゞ、是れ基督を瀆したる也。然も基督を稱して、猶太人たらずと云はゞ、是れ亦た基督を誣ふる也。彼等は或は尋常人よりも、より濃厚に、其の種族的色彩を帯びたらんも、未だ知る可らず。即ち孔子は普通の支那人よりも、より多き支那人にして、釋迦の印度人たり。基督の猶太人たる、亦た此類たらずんはあらず。而して其の時代の感化を享受したるも、同時の凡俗に比して、より熱烈なりしやも、未だ知る可らず。但た彼等の彼等たる所以は、此に止まらざるが故のみ。即ち彼等の脚は、煩惱の濁世を離れざるも、其頭首は高く青天の外にありて、何等の區分的制限を被らざるが爲めのみ。而し

て所謂る世界的大詩人に向ても、亦た同様の觀察を適用せざる可らず。何人も中古の伊太利を知らずして、ダンテを諒解するを得可らず。若し詩人は無何有郷の住人たるが爲めに、其の戸籍帳を繰るが如きは、詩人を研究する所以にあらずとするものあらば、それは實に研究の第一歩を誤るもの也。

詩人も亦
時勢の兒
社會の兒
社會英雄を作る乎、英雄社會を作る乎、細言すれば、社會詩人を作る乎、詩人社會を作る乎、是れ腐酸の問題たるが如きも、實は緊要の問題たる也、即ち如何なる社會學者も、何故に杜甫てふ原子が、支那唐の時代に生じたる乎、何故に彌耳敦てふ原子が、英國清教徒時代に生じたる乎は、解釋する能はざる謎題ならむ、如何に研究しても、不思議は終古不思議也、されど一步を轉じて、此の原子が、何故に、將た如何にして、彼等の如く生育し、發達し、成熟したる乎に到りては、苟も之を解明せんと欲せば、之を解明するの方便なきにあらざる也、即ち彼等は一面より見れば、時勢の兒也、社會の兒也、彼等は社會が出生したるにあらず、されど社會は彼等を教育せり、彼等は實に社會に負ふ所多大也、但た彼等が社會の大

大詩人の
所以たる

なる債務者たらざる所以は、彼等はより多く社會に寄與したれば也、彼等は社會より多くを得たり、されど更により多く社會に與へたり、彼等は、單に同時の社會に向て寄與したるのみならず、不朽に向て寄與したり、是れ即ち彼等が大詩人たる所以也、然も白雲の上に聳ゆる高山も、其の麓は大地にあり、吾人遠く雲の彼方を望むに就ても、先づ脚を此方の石徑に著くることを、閑却す可らず。

第二章 彌耳敦以前の歐洲及英國

五 文藝復興

吾人は既に詩及び詩人に就て、其の概念を語れり。是よりして先づ彌耳敦を説き、轉じて杜甫に及び、最後に兩詩傑の比較研究を以て、本文の局を結ばんことを期す。

彌耳敦を知らんと欲せば、其の前提として、必ずしも英國と云はず、必ずしも當時と云はず、其の以前より歐洲に磅礴したる時代精神を、看取するの必要あり。而して此の時代精神は、自から文藝復興と、宗教改革との二大思潮によりて、代表せらる。吾人は須らく此の二大思潮に就て、一瞥する所なかる可らず。極めて手短に分類すれば、文藝復興は、拉典人種の産物にして、宗教改革は、獨逸人種の産物也。前者は南歐を以て、其の本舞臺となし、後者は北歐を以て、其の本

二大思潮に就て一瞥

文藝復興と宗教改革

の文藝復興の曙光

舞臺となす。而して兩者の間、亦極めて緊密なる關係なくんば、要するに宗教改革も、亦た文藝復興の種子が、北歐に播かれて、出で來りたる收穫に過ぎざれば也。即ち南歐の文藝復興は、専ら希臘羅馬の偶像教的感化に浸染したるに拘らず、北歐に於ては、所謂基督教的文藝復興と變性し、其の自由討究、必然の結果は、羅馬法王の權威に向て挑戰するの、禁ず可らざるに到りしのみ。蓋し一四五三年——我が後花園天皇の享徳二年——土耳其人が、君府を陥るゝや、該府を以て、其の隱家となしたる古典學者は、希臘其他の古文書を携へて、伊太利に奔り、此に於てか文藝復興の曙光は、先づ伊太利に閃めけり。此れと前後して、活字の使用法行はれ、航海遠略の便開け、更らに閣龍コロンブスの新大陸發見あり、人心に異常の刺激を與へ、歐洲は、一の新氣運に入れり。此の如くして、多年中世紀の暗黒時代に酣睡し、教權桎梏の下に閉息したる人心は、期せずして、一大活躍を始め來れり。

然りと雖も、文藝復興は、決して無償の恩惠のみと云ふ可らず、之が爲めに其の

伊太利に於ける文藝復興の斷案

代に於ける基督教の腐敗の斷案

本舞臺たる伊太利は、希臘、拉典の舊文明を、復活せしめたると同時に、亦た其の舊罪惡をも再生せしめたり。人間一切の能力と、一切の肉慾との悉皆の發達と、人間一切の制裁と、廉恥との悉皆の破壊は、此の偉大にして、且、邪曲なる教化の二大特色なりとは、テューヌが、伊太利に於ける文藝復興の斷案にして、吾人も多く異存を挟む可き理由を見出す能はざる也。

蓋し中古史に於ける羅馬教會は、實に歐洲唯一の大勢力たりし也。彼等は宗教の代りに、教會を與へ、自由信仰の代りに、命令的教義を與へ、道義的熱心の代りに、規定せられたる宗教的行儀を與へ、赤心より進る、活力ある思想の代りに、皮相的、形式的の紀律を與へたり。此の如くして羅馬教會は、歐洲に於ける絶對無二の地位を占めつゝ、遂に中心より腐敗し來れり。而して文藝復興は、恰も其弊に乗じて出で來りし也。されど彼等は暴を以て、暴に代へたり。基督教の腐敗に代ふるに、偶像教の腐敗を以てせり。而して此の文藝復興は、教會を刺激して、健全ならしめざるのみならず、却て其の腐敗をして、大膽無遠慮、傍若無人ならし

めたり。

一四九〇年、法王の執事が、禁妾令を發するや、法王は之を取消さしめて曰く、從來僧侶として、未だ一人も蓄妾せざるものなく、若くは賣笑婦と親まざるものなければ也と、蓋し文藝復興の結果として、伊太利に發生したる文學は、人心を崇高ならしめんよりも、寧ろ放縱ならしめ、人を神前に拜跪せしめんよりも、寧ろ惡魔と握手せしめたりと云ふも、未だ必ずしも酷評にあらざる可し。然りと雖も、是れ唯だ其の缺點に就て云ふのみ、若し文藝復興の功德を擧げば、人心に一大解脱を與へ、且つ一大美趣を供したるを遺る可らず。但だ其の本質たるや、フロレンス府のロレンゾ・ド・メデシが歌うたる如く、「吾人は樂まざる可らず、何となれば、明日の事は期す可らざれば也」との一句にて總括せらる。蓋し文藝復興は、一種の享樂主義の宣傳と見る可きのみ。

一種の享樂主義の宣傳

六 宗教改革

宗教改革を目して、單に教會の革命に止まるものとするものあらば、是れ嚴を見て、山を遣るゝ也。宗教改革は、一面に於て、天國の鍵を握れりと稱する羅馬法王の權威に對する、個人的信仰の反抗たる。と與に、他の一面に於ては、拉典民族に反抗する、獨逸民族——廣き意味に於ける——の反抗也。更に立ち入りて觀察すれば、法王の教權統一に對する、帝王、公侯、或は國民的俗權の反抗也。吾人は宗教方面と與に、其の政治的方面に注視するを要す。

宗教改革と反抗の二方面

宗教改革の火は、實に獨逸の一礦夫の子、路錫ルツィヒによりて點せられたり。固より其の以前にも、幾回か先驅者なきにあらざりし也。されど其の歐洲の大火となりたるは、路錫が一五一七年——我が後柏原天皇永正十二年——に、法王の免罪符賣買を攻撃し、一五二〇年、法王の勅書を、市場に燒却したる時に始まれり。而して此よりして、燎原の火となり、遂に北歐を擧げて、殆んど火海たらしめたりし也。

宗教改革の火と路錫

疾風枯艸を吹く、蓋し其の機既に熟したるが故のみ。
アルプス山外に於て、文藝復興の影響を、最も多く享けたるは、獨逸也、されど獨逸民族は、再現す可き懷舊的歴史を有せざる也、彼等は拉典人種よりも、比較的、多く宗教心を有せり、彼等の古典の研究は、勢ひ基督教の聖經賢傳に向はざるを得ず、況んや獨逸皇帝の冠を被りたる歴世の帝王は、外面法王に歸服したるが如きも、恒に隱然一敵國として、互ひに相反目したるの歴史あるをや、此の如くして従來羅馬人と、獨逸民族との争は、新たなる題目を藉りて、新たなる事情の下に、再演せられたる也、吾人は路錫一唱の功を、偉ならずと云はず、されど彼をして近世歐洲史に新時代を劃出せしめたるは、實に如上の事情ありしが爲めと觀察せずんばあらず。

宗教改革は、獨逸以外に於て、瑞士に最も繁昌せり、路錫の名を記憶するものは、併せて瑞士チュリビに於ける、ツウインググリの名を想起せずんばあらず、彼は決して路錫の風を聞きて興りし者にあらず、彼は一五一九年に、獨得の見解に依りて、獨自の運動を開始したり、彼は路錫に比すれば、其の智見に於て、寧ろ近世的なりしが如し、路錫は豪傑の士なりしも、其の思想は、臆病なりき、彼は其の天性に於て、保守的に、其の教養に於て、亦た中世的の臭味なきにあらざりし也、されば彼は空拳を振うて、法王の威權に向て、挑戦するを敢てしたるに拘らず、却て鐵腕を提げて、他の進歩思想者を壓倒するを辭せざりし也、彼はウオムスの會議に於て、王公を睥睨し、獨身の積習を破りて、公然結婚し、隨處に破格の行動を逞うしたるに拘らず、到底修道院裏の修道士たる習氣を、脱し得ざりし也、而してツウインググりは然らず、彼は文藝復興の大解脱を會得して、之を宗教方面に善用せり、彼は實に新約聖書を曇りなき光によりて讀めり、彼の志は基督教を、多年の舊慣、故例より解放するに在り、而して路錫に到りては、寧ろ之を守株するを以て、其の本望と爲したり、是れ兩雄併立する能はざりし所以也、即ちツウインググりは、能く路錫を抱容したるも、路錫は一步も彼に假藉せざりし所以也。

更らに注目す可きは、瑞士のゼネバに於けるカルウイン也。彼は本來佛國よりの流浪人也。然も彼は其の萬牛も動かし難き堅志と、其の壁立千仞の氣象と、其の精審、銳利なる頭腦と、其の清操氷雪よりも厲しき素行と、而して其の組織的能力とによりて、遂にゼネバに政教一變の神政府を建立するに到れり。即ち宗教改革は、彼に頼りて、殆んど大成したりと云ふも、溢辭にあらず。而して所謂基督教新教の教理を、系統的に作成し、其の教會規律を、組織的に構造したるもの、専ら彼の力に歸せずんばあらず。假令彼の教義を奉ずるにせよ、奉せざるにせよ、苟くも天下後世の新教徒たるものは、何人も彼に向て若干の恩恵を被らざるものなき也。

七 英國に於ける復興と改革

歐洲を一掃したる文藝復興と、宗教改革とは、固より英國をも除外せざりし也。チッドル朝の全盛期とも稱す可き、顯理八世時代に於ては、外患漸く熄み、内政正さに統一に就く。乃ち文藝復興の氣運も、或はコルエットの學校建設により、或はキャクストンの書籍出版業により、或はサートマス・ムアの著書により、或は當時歐洲に著名なる碩學エラスムスの來遊により、或はチンデルの新約聖書英譯により、鼓吹發揚せられたるもの、少小ならざりし也。

若夫れ宗教改革の一事に就ては、意外なる方面より發展し來れり。本來顯理八世は、我執、保守、一天張の性質にして、固より宗教改革に、同情を表す可き理由なかりし也。然も彼が皇后カザリンを離別し、宮女アーン・ポレンと結婚せんとして、法王の允可を得ざるや、彼は猛然として、自から羅馬法王の羈絆を脱して、英國教會の獨立を圖れり。彼は一五三五年議會をして、教會に對する君主至上

權法案を通過せしめ、自から英國教會首長の位を占めたり、されど彼の目的は、唯だ英國教會の財産を利し、且つ法王の牽制を拒絶したるに止まり、其の教義の如きは、毫も關心する所にあらず、其の結果は、羅馬法王の代りに英國王を取り易へたる迄なれば、之を目して宗教改革と爲すは、聊か其の當を得ざるの看なきにあらず。

されば彼の一生を通じて、彼は一方には、羅馬舊教徒を抑壓すると同時に、他方には、所謂宗教改革の新教徒を抑壓し、其の間に於て、何等の用捨も、差別も是れあらざりし也、此れよりして爾來英國には、三派の教徒互ひに分立し、相争闘したり、(第一)は從來の羅馬教徒にして、依然法王の權威の下に服従する者也、(第二)は英國々立教會徒にして、其の教義に於ては、前者と大差なきも、法王の代りに、國王を首長とするもの也、(第三)は純粹なる新教徒にして、法王を首長と認めざると同時に、國王をも教會の首長と認めず、所謂信仰によりて、神の前に義とせらるゝを、主一の目的とするもの也、英國政界の消長は、往々此の三派の勢

三派教徒
の分立と
争闘

方の消長、合離に因ること、爾後三百餘年間の歴史、之を證明す。

英國の或る詩人は、英國に於る福音の新光は、一個の美人の瞳子より、閃めき出でたりと歌へり、されど顯理第八世の皇后離婚問題、事實に於ては、宮女結婚問題を以て、宗教改革唯一の動機と爲すは、抑々皮相の見たらざるば、あらざり、英國にも獨逸同様の反抗的準備は出で来れり、僧侶、寺院の累積したる富は、王家の夙に鋭爪を加へんとしたる好餌たりし也、況んや國民的精神の旺盛は、英國の遺傳的誇りたるに於てをや、要するに顯理と、法王との葛藤は、僅かに其の破裂の機會たりしのみ。

然も此の一舉の爲めに、却て眞成なる宗教改革の大勢は、防止せられたり、乃ち英國に於ては、唯だ頭首のみを取り換へ、其の本體は、他の北歐諸國の急轉直下に際して、依然たる羅馬舊教の面目を保持したり、而して之が爲めに、遂に所謂清教的の反抗を激成するの、已むを得ざるに到らしめたり。

然りと雖も、顯理第八世の功も、亦た没す可らざるものあり、彼は國家を代表し

英國に
も
反抗的
準備あり

清教的
反抗の
激成

の功没すべからず

復興と改
革との提
携断絶

て、羅馬に反抗し、俗人を代表して、僧侶に反抗せり。彼は之が爲めに、國民的精神を助長せしめたり。彼は之が爲めに、國民的自信力を扶植せり。彼の心事の如何は、其の功果の著明なるより見れば、寧ろ批判するの必要なき也。

當初に於ては、英國の文藝復興と、宗教改革とは、相提携して出で來れり。されど此の提携は、やがて断絶せられたり。何となれば文藝復興は、寧ろ權威者を謳歌する方面に傾き、宗教改革は、恒に權威者に反抗する方面に傾きたれば也。而して一時は、國民と國王とが、相提携して、羅馬教會を征伐したれども、國王が教會の首長となり、教會が國王の爪牙となるに際しては、國民の或者は、國王と教會とを打て、一個の對抗物と做せり。蓋し英國教會は、羅馬に對しては、進攻の態度に出でたりしも、所謂清教徒に對しては、防禦の位置に立てり。而して英國教會は、專制、自由の交闘時代には、專制權の堅城鐵壁となりたれば也。

エリサベ
ス女皇時
代の低回

英國史上
の高潮期

英國海權
の扶植時
代

八 エリサベス時代

吾人は彌耳敦の時代に到達するに先ち、姑らくエリサベス女皇の時代に、低回するの必要を感じず、何となれば彌耳敦の時代は、一面より見れば、此の時代に滄蓋汪集したる積水の潰決して、激浪狂瀾となりたるに過ぎざれば也。

抑、エリサベス女皇は、偉大なる時代に於ける、偉大なる君主たりし乎。將た偉大なる時代に於ける、小人的君主たりし乎は、史家の論、未だ定まらず。但た其の時代が、總ての點に於て、英國史上の高潮期たりし事は、誰しも異議を容るゝの餘地なし。

二十世紀の今日迄、世界的帝國を扶植したる英國の海權は、實に此の時代に創まれり。十九世紀の劈頭に於て、大奈翁に最後の一撃を加へたる、ウオターロの大陸戰に比す可き、西班牙の霸權を消沈せしめたる「アルマダ」大艦隊の撃破は、實に千載の一遇にして、今尙ほ赫灼たる、英國海軍の光明也。而して當時の外

交政略は、武勳よりも更に振へり。最初には西班牙に結んで佛と戦ひ、中より和蘭に於ける西班牙の叛徒を幫けて、西班牙を挫けり。而して英國は、武力の勝利以上に、平和の勝利を贏ち得たり。

人望ある
女皇ある

女皇は實に顯理八世と、其の第二次の妻たるアイン・ポレンの間に生じたる女也。彼は奇なる運命に弄ばれ、先后の子、其姉メリの後を襲ぎて、王位に躋れり。メリは頑冥なる舊教徒にして、剩さへ西班牙王フィリップと結婚し、英國に於ける宗教改革を一掃し去り、峻酷なる迫害を以て、之を羅馬舊教の故態に復せんと企てたり。更らに佛國と戦うて、英國海峽の向岸なるカレーの地を喪へり。彼は實に英國危惧の本尊たりし也。されば彼の後にエリサベスを見るは、猶ほ積雨の後に、天日を望むの快感を、國民に與へたりし也。此の如くして、彼は即位の當初より、人望ある女皇として、出で來りし也。

女皇の周
圍

彼の周圍には、幾許の輕佻、躁競の嬖人寵漢、去來せり。されど頼ひに其の側には、老成善謀のパアレイあり。清教徒の心事を以てマキヤヴェリの術數を逞しう

女皇と英
國國教制
度の基礎

せるウォルシンガムあり。能く英國をして、歐洲政局の大舞臺に於て、遺算なからしめたりし也。況やドレイキ、ホキンス、ローレ等の奇材、異能の徒輩出し、萬里の波濤を開拓し、航海、遠略を之れ勗めたるをや。

エリサベスは、其の嗜好より云へば、寧ろ舊教的儀式を悦びたらんも、當時の趨勢は、好惡の時代にあらずして、生死存亡の時代也。彼と王位の競争者たる蘇格の女王メリは、舊教徒の代表者也。其の海權の競争者たる西班牙の朝廷は、赤熱なる舊教の本家也。彼は自衛の政策として、顯理八世の國立教會制度を恢復し、更らに之に向て、其の極印を捺す可き必要に迫られたり。此の如くして、君主に教權を一任する君主至上權法と、議會によりて國教を規定する統一法とは、施行せられたり。此の如くして、現時に存續する英國の國教制度は、其の基礎を確立せり。

女皇の晩
年と民望

然りと雖も、彼の晩年は、決して其の上半期の如く、民望豊かならざりし也。否、國民の不平は、其の外患の消失と與に、空湧し來れり。彼は國家多難の際に、國民

が一致して彼を奉戴したる如く、平和の時節にも、然る可しと期せり。されど國民は平和と與に、其の權利を要請し、其の疾苦を呼號し、彼が之を聽納せざるや、其の反抗の氣勢を揚げたり。

歐洲大陸の兵亂と英國の小康

蓋し米國よりは、銀の輸入あり、歐洲大陸よりは、新教徒の織布業者等、迫害を避けて來るあり、半海賊、半貿易の業は、盛に流行し、而して顯理八世が、寺院の地所没入の結果は、地方に多數の大小地主を生ずるあり、當時歐洲大陸は、兵馬の衝と化し、小康を保ちつゝあるは、僅かに英國あるのみ、是亦た英國當時の繁榮を助長したる、一因たり。

自覺的民權の增長

此の如くして、一國の繁榮と與に、民權的自覺心は、愈々增長し來れり。所謂る衣食足りて、禮節を知ると云はんよりも、衣食足りて權利を知ると云ふの、適切なるに若かず。況や國家の費用は、日一日と多瑞なるに際して、政府の國民に求むる所、勢ひ増加せざるを得ず。而して國民は、固より無代價にて、此の徵求に應ず可くもあらず。此の如くして、庶民院の權利は、自然に膨脹し來りし也。然も女皇

が此の新傾向に順應せず、之を識認せざるが爲めに、勢ひ衝突を來たさざるを得ざりし也。

九 清教徒

エリサベス
女王の晩年

歡樂極りて哀情多しとは、實にエリサベス女王の晩年也。庶民院の不平と與に、所謂清教徒の不平なるもの、勃興せり。蓋し彼の治世に於て、メリ時代に迫害せられ、大陸に避難したる清教徒は、概ね復歸せり。然も彼等は、大陸の新空気を呼吸し、路錫ツウイン、特にカルウインの思想に感染し、之を携帶し來れり。而して女王の清教徒に對する、壓抑の行動は、一層彼等を驅りて、反抗の極端に奔らしめたり。

清教徒の
反抗を激
成したる
所以

女皇は其の本籍より云へば、寧ろ文藝復興に屬するも、決して宗教改革に屬せず。但だ政治的理由の爲めに、羅馬法王と絶縁し、自から其父の故轍を襲うて、國立教會の首長、若くは統治者と宣したるも、其の本心は、恐らくは當時の文華を飾りたる、多くの詞人作者の徒の如く、自由思想者たりしならむ。彼はチュドル朝の一子相傳たる、專制的血液の、最も濃厚なる一人なりき。彼は曰く、何人も朕

か法律、命令に依りて規定せられたる線路を、一直線に進む可し。左方に偏するを許さず、又た右方に倚するを容さずと、此の如き態度を以て、彼は羅馬舊教徒と、清教徒とを遇せり。されど彼は羅馬教に對しては、政治上偶然の敵として之を視、清教徒に向ては、中心より之を嫌惡せり。前者は、唯た其の芽を摘めり、後者は、其根を絶たずんば止まざりし也。是れ彼が清教徒の反抗を、激成せしめたる所以也。

三種の清
教徒

一概に清教徒と稱するも、自ら三種の分類あり。第一は國王を首長とする、國立教會の制度を識認するも、其の羅馬舊教的の臭味に反對し、若くは監督ビショップの職權を制限し、若くは僧侶の戒飭を厲行せんとするが如きの徒、是れ也。第二は所謂長老派プレズビテリアンに屬するものにして、其の教會政治に就ては、唯だ國王を首長と仰がざる迄にして、教會制度の尊嚴を維持する點に於ては、前者と其揆を一にするもの也。第三は所謂獨立派にして、個人的信仰の自由を主張する者、是れ也。然も清教徒發生の當初に於ては、第三の分類に屬する者は、頗る僅少にして、乃ち

清教徒と
文學及藝術

清教徒中よりしても、彼等は外道視せられたりしが如し。元來清教徒は、博愛無敵の新約聖書よりも、寧ろ破邪敵愾の舊約聖書より、其のインスピレーションを得來れり。されば其間、自から一種の嚴厲、峻克、褊狹、頑固の風を助長したるものなからず、此の意味よりして、清教徒と文學、藝術は、兩立し得ざるの看なしとせず。されど是れ、唯だ其の極端に就て云ふ可きものにして、其の兩立の絶對的不可能にあらざるの事實は、本題の主人公たる彌耳教に於ても、之を見るを得可し。

清教徒の
反抗に對する
感壓

却説も清教徒は、羅馬舊教の陳套を脱せざる國立教會の儀式、禮拜よりも、基督敎の眞理を宣傳するの、説教に重きを置き、而して國立教會の僧侶が、其求に應ぜざるや、更らに他の説教者を情ひ來りて、説教會を開設しつゝありしに、女皇は之を以て、彼の教權を冒瀆するものと認め、此の風潮を撲滅す可く、其の餘力を剩さべりし也。之が爲めに投獄せらるゝ者、前後相接し、中には一人にて、三十二回も投獄せられたる者さへあり、而して其の或る獄裡に於ては、日中さへも、

反抗の
勢倍々
漲る

彼自から其手を見る能はざる程、暗黒なりしと云へば、其の慘狀も亦た想見す可き也。

多くの
遺物

清教徒は説教會の解散に酬ゆるに、秘密出版を以てし、或は更に公然國立教會の監督を攻撃し、反抗の氣勢は、抑ふれば倍々騰れり。然も當時の彼等は、決して王家に向て、忠順の心を失はざりし也。彼等の或者が、其の言論の爲めに、右手を斷たるゝや、其の左手を以て帽を振うて曰く、女皇萬歳と、其志亦た悲しむ可きのみ、而して此の如き忠順なる人民をして、干戈を取りて起たしむるに到りたるは、抑々孰の責任ぞや。

エリサベスの時代は、實に多くの遺物を、後昆に残せり、而して其の重なる者は、庶民院の不平と、清教徒の反抗也。若し後主にして、變通の道を講せば、必ずしも其の手段なきにあらざりし也。されど守株の政治は、唯だ革命の大勢を激成する以外に、何等の効用あらざりし也。

一〇 文學の黄金時代

英國文學の黄金時代

歐洲の邊境とも云ふ可き英國には、文藝復興の花は、聊か後れて發けり。然も其の發くや、宛も寒地に於ける梅、杏、桃、梨の一時に妍を競ふ如く、エリサベス時代に於て、百花爛漫の姿を呈せり。是れ則ち英國文學の黄金時代也。吾人は或る意味に於ては、其の紹述者たり、或る意味に於ては、其の轉回者たる彌耳敦を、理會するの必要上、此の時代の文學を一瞥せざる可らず。

要するにエリサベス時代の文學は、歐洲一般を風靡したる文藝復興の氣運の、煥發したるものに過ぎず。即ち希臘羅馬の古文明に對する熱狂せる追慕、人間能力の揮揮を刺激する雄心、一切の桎梏を超越せんとするの解脫、美的理想の飛揚、皆な其の揆を一にせずんばならず。但だ英國には英國固有の國情あり、英人には英人本來の面目あり。而して其の時代には、國運が總ての方面に向て、發揚開展せる傾向あり。此に於て、一種の特色ある文學の黄金時代を、現出したる

文藝復興の大氣運に促進せらるる

英國文學史上の巨人沙翁

のみ。然も其の淵源の、文藝復興の大氣運に促進せられたるや、言を俟たず。沙翁はエリサベス時代の大立者のみならず、英國の總ての文學史上に於ける巨人也。されど彼は、不朽の作を人間に與へたれども、作者其人に就ては、殆んど自から語る所なし。彼の作の普及せるに反して、彼に對する知識は、今日に於てさへも、極めて貧弱也。但だ彼は一商家の子にして、其の教育は、當時の同一階級の子弟の享受したる程度以上には、あらざりし事を知るのみ。彼は希臘の古典に對する直接の知識なく、拉典文さへも、若し譯文あれば之を利用したる程なれば、其の力の不充分なりしや、推す可し。彼を稱して無學と云ふは、誣妄也。彼は淺膚雜駁ながらも、當時に於ける、一通りの知識を具へたりしならむ。されど彼の知識は、鳥が栗實を啄みたるの類たりし也。されど彼は實に天材也。彼は他人の道傍に委して顧みざる材料よりして、却て天下の壯觀、美觀、偉觀、崇觀の大伽藍を、空中に築き成せり。『彼は近時の詩人中、否な恐らくは古代の詩人中に於ても、比類なき最偉大、最博厚の心を有せり』とは、是れドライデンの評語にし

て何人も首肯する所也。

戯曲家としての沙翁を除けば詩人としてはスベンサーを擧ざるを得ず彼の『牧羊者の曆』若くは『仙郷の女皇』の如きは時代の或る方面の代表的作と稱するも、不可なからむ彼は沙翁の如く、大解脱者にあらず寧ろ其心には、若干の清教徒的思想ありしも、其の美を仰景するの心と、其の技巧とに於て、文藝復興の作者たりと云はざるを得ず。而して其の長篇は、人をして神に近かしむるの根本思想を演繹し、一種の教訓的意義を包みしも、彼の短歌や、直ちに性靈を吐き、清婉玲瓏、一唱三嘆の妙あり。

若夫れ彼の友人サー・フィリップ・シドニーに至りては、文人として傳はるよりも、或は武士の標本として不朽なるやも、未だ知る可らず。彼が大陵の戦陣に於て、奮闘重傷を負ひ、渴して水を唇にせんとするや、顧みて其の傍に、傷兵の横はるを見て、之を與へて曰く、彼の傷は吾よりも重しと、而して彼は遂に斃れたり。彼の最後に於ける男兒的行動は、算盤片手に義侠を説くと評せられたる、英人

詩人と
しては
スベン
サー

シドニー
の武士
的行動
と『護
詩論』

の心腸をさへ躍らしめたり。而して彼の『護詩論』の如きは、其の細條に就ては、後人の異議を招きたるも、詩は人の製作中に於て、最も崇高なる産物なりとの斷案に於ては、千古不磨の眞理を道破したるものならずんばならず。彼は實にスベンサーが、其の作中に於て、理想として詠じたる武士の諸徳、勇敢、信神、恭敬、正義を具備したる紳士也。而して彼は實に、文藝復興の殆んど諸の美點を、結晶したる典型也。

散文に於ては、英國教會の爲めに、長城を築きたりとも云ふ可き、フッカーの『教會政治の法規』を擧ぐ可く、更らにペーコンの論文を以て、其の甲科に措く可きが如し。ペーコンの論文は、論文の上乗にして、其の簡勁なる短章に、處世の妙諦、施政の秘訣、學問の金針、殆んど擧げて漏らす所なく、警句、妙句、冷句、諷句、陸離爛斑、斷錦、片玉、人をして應接に遑あざらしむ。所謂其人を以て、其言を廢す可らざる也。

要するにエリサベス文學の特色は、其の膨脹的精神の一切に貫通したるにあ

フッカー
の散文と
ペーコン
の論文

り其の作者によりて、調子の高低はあるも、衰世寒風の聲にあらずして、洋洋、雍雍たる大雅の音也。是れ單に文藝復興のみと云はず、又た興國の氣運に促かされたる、時代的特色と云ふ可きのみ。

一一 必至の革命

エリサベス女王の死と、
一世の惹斯の立

悪主にあ
らずして
弱主

エリサベス女王は、死に抵る迄、其の後繼者を定めざりし也。曰く、朕は生ながら葬らるゝを欲せずと、而して彼の死するや、蘇格王惹斯六世^{スコットランドのジェームズ}を迎立せり。是れ實に英國に於けるスチャアト朝の始也。彼はエリサベスの敵にして、其の爲めに殺されたる蘇格女王メリの子也。メリは惹斯五世の子にして、惹斯五世の母は、英國顯理八世の姉也。惹斯六世は、此の如き血脈の關係を以て、英國の王位に達せり。此に於てか、英國と蘇格とは、一王の下に統治せらるゝ事となりぬ。彼は英國に於ては、惹斯一世と云ふ。

彼は悪主にあらずして、弱主也。但だ彼には一種の虚榮病ありて、自から帝王の盛徳大智を具備したるか、如く振舞へり。されば彼に向て、『當時歐洲に於ける君主中の最も賢明なる大莫迦者』と云ふの評語を下したるは、破的と云ふ可し。彼にして平人ならしめば、隣里郷黨に、若干の物笑の種子を供給する、一個

の無害紳士として終りしならむ。憾む可し、彼は不幸にして王冠を戴けり、而もエリサベスの時代に醜辭したる、政教両面の不平の、漸く爆發せんとする一時に際せり。

ノックス
と蘇格の
宗と蘇格の
改革

蘇格の宗教改革は、カルウインの門徒たるノックスによりて、創められたり。彼は大膽なる徹底者にして、若し蘇格に貴族、土豪微りせば、彼は容易にカルウインが、ゼネバに於けるが如く、政教一致の神政府を設立するを得可かりし也。然も貴族、土豪は、羅馬舊教の勢力を蹂躪し、其の財産を沒收するには、銳意なりしも、之を擧げて新設の教會に歸するを肯せざりしが爲めに、其意の如くならざりしのみ。乃ち惹斯の如きも、幼時に於ては、カルウイン派の薰陶を受けたり。彼が羅馬法王を目して、非基督者と論難したる著作の如きは、其の適證也。

國立教會
と結託

されど彼の英王となるや、勢ひ國立教會と結託せざるを得ざりし也。彼は自ら「監督なければ國王なし」との要語を發見せり。是れ則ち國立教會の諸監督を以て、國王の藩屏と爲す也。而して監督輩も亦た、「國王なければ監督なし」

前代老臣
の凋落

との要語に想到したり。是れ國王の擁護を藉らざれば、國教は存立せずと云ふ義也。此の如くして一方に於ては、君主と國立教會と、他方には、議院と清教徒との對立を見るに到りし也。此の形勢や、彼の時代に於て始まりしにあらざるも、彼の時代に於て、長足の促進を倣せり。

彼は固より英人よりは、異邦人視せられたり。彼はエリサベス程の政治的手腕なく、又た駕御の術を知らず、而して前代の大宰相たるパーリーの子にして、其の材器に於て、父に多く譲らざりし前代よりの宰相たるロバート・セシルは、憂と勞苦とを以て逝き、萬里の外に功勳を策し、雄圖山の如きローレーは、刑死せられ、あらゆる前代の老臣は、排斥せられざれば、凋落し、事を用ふる者、皆な彼の周圍に集る雜輩のみなりき。

惹斯一世
の惡政

彼や、姦面媚容の徒を愛し、之を愛するの餘、乍ち之に政柄を與ふ。之が爲めに財源を枯渴ならしめ、新たに誅求を事とし、或は重官賣爵となり、或は賄賂の強制となる。是れ尙ほ可也。更らに國家の大事を誤るの政策を來したる、幾許なるを

太子顯理
の夭折

外交政策
の不成功

知らず、乃ち彼が最後の嬖人ウイリアスの如きは、乍ちバッキンガム公爵を授けられ、彼の内廷の左右より、一躍直ちに國家の大政を總攬し、遂に其の輕銳無謀の施設の爲めに、英國をして内憂外患に瀕せしめたり。但だ國民の僅に恃みとしたるは、太子顯理のみ、彼は實に新時代の趨勢を會得し、國民と其の志を同じうする者として、屬望せられたり、されど天は是非とも革命を英國に降す可く、彼を奪へり、彼や十九歳にして逝けり、彼に次ぐものは、實に查斯也、即ち他日斷頭場の露と消えたる、不幸なる查斯一世也。彼の外交政策は、和蘭を見捨て、西班牙と結託するにありき、彼は查斯の爲めに、婚を西班牙に求め、其の意の如くならざるや、查斯をして、バッキンガムを伴ひ、西班牙に赴き、其事を遂げしめんとしたり、彼等は面目を潰して歸國せり、然も國民は其の不成功を驩迎せり、何となれば、國民の心は、擧げて西班牙との提携に反したれば也、而して不成功の結果は、亦た西班牙と破裂せり。惹斯一世の一代を通じて、王家と議院との衝突は、其の激甚を加へたり、然も議

王家と議院
の衝突

院の得る所は、尙ほ未だ多大ならざりし也、史家ハラム曰く、議院二十年間の奮闘によりて、贏ち得たるは、專賣、壟斷の弊を罷めたる、彈劾の舊權を恢復したるとにありと、バッキンガムが、議院を使嗾して、其の反對者を彈劾せしむるや、王は彼及び查斯に語りて曰く、此端一たび發く、恐らくは卿等他日彈劾を飽喫するの時來らむと、賢明なる莫迦者の口よりも、亦た一片の賢明なる豫言は、吐出されたりし也。彼は一五六六年に生れ、一六〇三年に英王の位に上り、一六二五年に死せり、即ち彼の死は、宛も彌耳敦が劍橋大學に入りたるの年にてありき。

第三章 彌耳敦生涯の第一期

一一一 反抗者

吾人は漸くにして、彌耳敦の時代に到着したり。蓋し惹斯王の最後十六年は、實に彌耳敦の最初十六年と同歳時なれば也。即ち彼は、反抗の時代に反抗者として生れ出でたり。彼の一生を、三齣の悲劇となし、其の序齣を青春修養時代となし、其の中齣を政界惡闘時代となし、其の終齣を憂苦杳至の時代となすは、吾人も多數の彌耳敦研究者と與に、異存なき也。但だ彼の一生を貫通したるは、戰闘的行徑也。彼は到底戰士也。彼は其の反對黨と戰ふのみならず、自個の失明に對してさへも、尙ほ挑戰を辭せざりし也。世界詩人多し、然も詩人として彼が如き硬漢、果して何くに之を求む可き。

詩人を大別して、主我的、沒我的の二者に分類せん乎。法馬、沙翁の如きは、後者に屬し、檀德、彌耳敦の如きは、前者に屬せむ。吾人は今尙ほ『イヤド』『オデッ

「イ」が、世界至上の作物の一たるを疑はず、されど其の作者と稱する法馬に就ては、殆んど知る所なき也。甚だしきは彼を目して、亡是公と做す者さへある也。沙翁の詩量は、大海の測る可らざるが如し。されど彼は唯だ人情の機微を穿ちて、容易に其の真絃に觸れたるも、彼の作中より彼を見出すとは、殆んど不可能の事也。彼の覆面は、餘りに巧妙にして、彼の手にて動く人形は、宛も人形自から活動するが如く、觀者の眼に映じたり。彼は教訓も、法語も、隨意に公等の此中より抽出、拾收するに任かす。願くは作者たる予に、頓著せざれと、云はん許りに振舞へり。

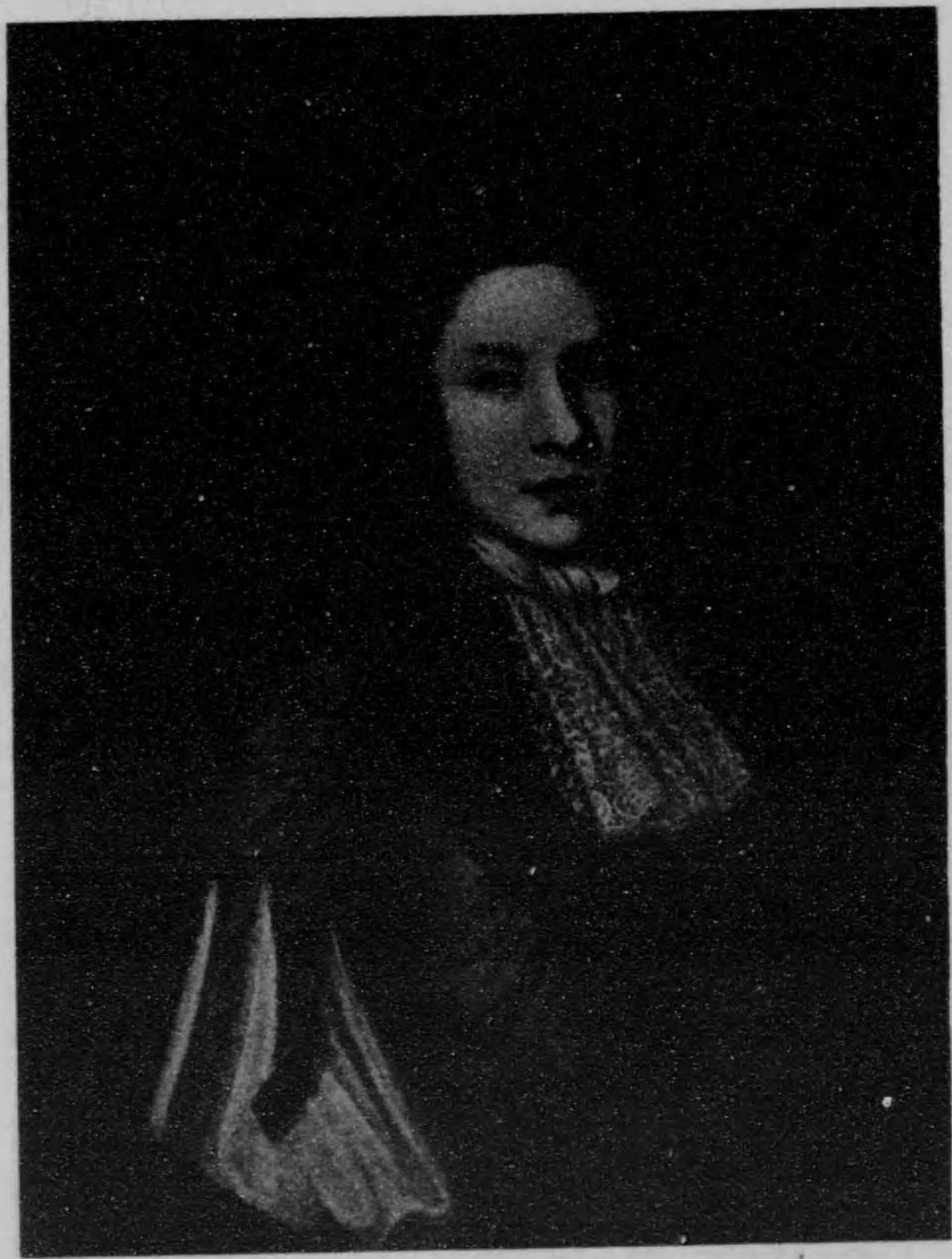
之に反して檀德の神曲の如きは、作者を知らずんば、其の真味を會得する能はず。神曲を會得せずんば、作者の眞面目を諒解する能はず。而して彌耳敦に到りては、更らに一層其の痛切なるを見る也。彼は自個の偉大なることを意識したる偉人也。若し之をしも病所と云はゞ、彼の病や、實に醫す可らざる也。彼は其の詩中に、自傳的の暗示、諷説を與へたるのみならず、彼の散文中には、公々然として、

詩中に自傳的の暗示

中間二十年は政戦の中心に在り

自個の閱歷、志趣を、遠慮會釋なく排叙せり。されば其の作中より、彼の自傳を構成するは、細心良苦の精讀者にあらざるも、決して至難の業にあらざる也。加之、彼一生の中間二十年は、實に政戦の中心にあり。彼若し其の中心的人物たらざりしならば、少くとも其の周邊に立つ一人たりし也。當時中外を鼎沸せしめたる各種の問題には、彼は概ね没頭せざるはなかりし也。而して是れ皆な間接に、彼自身の記録たる也。況や彼の壯時、彼と寢食を與にし、最後迄も接近したる、彼の姪たるフィリップスありて、彼の傳を作り、更らに彼と同時のオペレーなる者、其の自から知る所のみならず、あらゆる彼の身邊の者を探討して、彼の逸事、逸聞を蒐集したるをや。若夫れマンソン教授のミルトン傳に至りては、凡そ彼と五分間接觸したる者は、舉げて漏らす所なしと云はるゝ程なれば、彼の一代記としてのみならず、彼を中心としたる時代の百科全書と云ふも、不可ならず。されば吾人が、彼に就て知らんと欲する所は、其の少きに苦しむよりも、寧ろ其の多きに苦しむ也。

更らに彼の略傳に就ては、英國文人傳叢書中のマーク・パチソンの一冊、精該深透、殆んど理想的に庶幾し。博士ジョンソンの彌耳敦傳に至りては、如何に正直にして偏僻多き老博士が、其の政治、宗教の信念に於て、自から邪徒、異端視したる盲詩人に對し、自個の文學的良心の上より、公平ならんとを勗めたるかの跡、斑々として見る可く、乃ち彼の論評の時に正鵠を逸し、時に極端に驀りたるに拘らず、尙ほ之を以て傑作の尤となさざるを得ず、而して所謂彌耳敦の論評家に到りては、前後相接して、僂指に違あらず。彌耳敦は實に自から語るのみならず、他をして能く語らしめたり。されば記者が彼に就て語らんと欲して、如何に苦心するも、到底他の範圍を越ゆる能はざる也。但だ記者には記者の感興あり。事實は一なるも、感興には自から特色なきにあらず。是れ厚顔讀者の寛容を要請する所以也。



彌耳敦十歲時之肖像
〔和蘭ヤセン畫〕

彌耳敦の
時代と其の

父は理想
的の愛育者

一三 幼年の教養

彌耳敦は一六〇八年十二月九日、倫敦に生る。即ち我が慶長十三年、徳川二代將軍秀忠の時代にして、中江藤樹の生れたる歳也。彼は此の如くスペインの死後十年、沙翁の死前八年に生れたり。而して沙翁の『アントニー及びクレオパトラ』の戯曲は、其の少し以前に世に出で、ベリッソンの『古代の智慧』や、ロレーの世界史や、將た欽定英譯聖書や、皆な此際に出で來らんとしつゝありし也。彼は實にエリサベス文學極盛の域を過ぎ、清教徒文學の未だ起らざる時に生れたり。而して彼の文學上の地位は、山彙の一峰と云はんよりも、孤峰突兀、天を衝て聳立したりと爲す可きは、本文通讀の後、自から分明ならむ。

彼は其父に於て、理想的の愛育者を見出せり。彼の祖父は、牛津州オックスフォードの裕福なる郷士なりき。但だ彼の父は新教徒にして、祖父は舊教徒なりしが爲めに、父は信仰の爲めに、遺産相續を放棄し、徒手空拳倫敦に出で、其の運命を開拓せり。而して

遂に公證人の業——契約文書の調成、土地抵當、金錢融通の媒介——に従事し、其の才幹と勤勉と、節儉とは、彌耳敦の生るゝ時節には、已に相應の家を成すに到りし也。彌耳敦は一生を通じて、文字の生活より離れざりしも、未だ曾て生活の爲めに、文字の業に従ひたることなし。而して是れ皆其父の能く彼を諒解し、彼を抱容し、彼をして其の志の存する所を發揮せしめたるが爲めのみ、父微りせば、彼あらざる也。

特に彌耳敦を愛重

彼の父は清教徒なりしも、其の業餘、藝術に趣味を有し、韻文を作り、特に音楽を好み、素人藝以上に詣り、其の作譜の如きも、當時の曲譜書中に採入せられたるもの、少しとせず。而して彼や、他に長女末男あるに拘らず、特に彌耳敦を愛重し、夙に其の大成を期し、其の教育に就ては、殆んど全幅の力を竭せり。

庭訓に負ふ所多

惟ふに彼はミルの父の如く、教育を以て、其兒を己が意の如く製造せんとせず。寧ろラスキンの父の如く、其兒の天性を助長、發育せしめんと欲したりしならむ。彌耳敦の言、其父に及ぶ毎に、恒に感謝と敬慕とを以て充したるを見れば、彼

家庭教師と學校の先生

の庭訓に負ふ所の多大なりしや、知る可し。彼は其母に就て、多く語らず、されど語る所によれば、最も賢母にして、就中慈惠を以て、其の附近に知られたりと云へり。惟ふに温良、貞順の婦人たりしならむ。

彼は其の家庭教師と、學校の先生に於て、俱に其人を得たり。彼の父は一六一九年彼の十歳の頃より、家庭教師として、蘇格蘭人ヤングを聘せり。彼は短髮なる清教徒也。彼は後年に於て、清教徒中の錚々たる僧侶となりぬ。而して翌年より彌耳敦は、聖保羅學校に通學せり。校長はギイルにして、博識なる良先生の名高かりし也。而して彼は其子少ギイルと交を結べり。更に其の同學に、歸化伊太利人醫師の子チロダチイあり。互に意氣投合、死生相渝らざる親友となれり。

彼の篤學と幼少時代の志望

彼はミルの如く、マコレーの如く、早熟の少年にあらざりしが如し。彼が十五歳の時に、英譯したる詩篇は、未だ彼が前途の大成功を豫想す可き高手を示さる也。されど其の篤學は、彼の學問に對する熱心と、父の不息なる注意とを以て、彼の第二の天性となれり。彼の自から語る所によれば、十二歳以來、未だ曾て半

夜の前に、寝に就きたることなかりしと云へり而して彼の晩年「復樂園」の長篇中の、荒野に彷徨せる基督の獨語に、『予が幼少なるや、少年の嬉戯は、予の樂にあらざりき。予が全幅の精神は、當初より天下の公益たる可き事を學び、且つ知り、而して後之を爲す可く、眞面目に定まれり。予は自から此目的の爲に生れたり。即ち總ての眞理、總ての正當なる事を、振起す可く生れたり。』との一節は、蓋し夫子自から、其の幼少時代の志望を語りしものならむ。

彼の十歳の時、父は和蘭の名工ヤンセンをして、彼の肖像を畫かしめたり。其畫今尚ほ存せり。吾人は親しく原畫を見ざるも、其の複製によりて、其の髣髴を得る也。畫面に現はれたる少年の彌耳敦は、面容橄欖實形にして、後肩に房々したる髪を被り、鼻梁正しく、面の中心に聳え、双眸閃耀、口角婉にして、嚴、顎骨は、自から剛柔の中正を保ち、一切の輪郭、殆んど希臘の大理石の彫像にも見ま欲しき心地せり。美少年の語は、未だ此の神々敷、氣品の清高なる少年を、形容するに足らざる也。

彼の十歳の肖像

一四 大學生活 (一)

彌耳敦は、一六二五年二月、劍橋大學の基督校の免費生として入學し、同四月より寄宿生となれり。是れ實に彼が十六歳の時也。而して此間に於て、國家を革命の趨勢に放擲したる、惹斯一世は逝き、查斯一世は、英國史上悲劇の大立者として、王位を踐めり。彌耳敦と、查斯とが、如何なる歴史の交叉點にて、接觸す可きかは、唯だ神之を知るのみ。

當時の劍橋大學には、青年の心を鼓吹す可き大先生あらざりし也。例せば、其の一片の説教にて、他の心を聖化せんとするニューマン、或は一回の應接にて、他を心酔せしむるジョウエットの類は、全く是れあらざりし也。當時の劍橋大學は、希臘拉典の古典研究はれざりしにあらざりしも、尙ほ中世的因襲の學問、其の殘燭を吹き居れり。彌耳敦が好尚の一なる、數學の如きは、殆んど顧みられざりし也。されば彼は云へり、若し予自から求めて之を修めずんば、予は最終の學

劍橋大學に入學

當時の劍橋大學

在學一年
學にして休

位を授かる迄にも、何等數學上の知識なくして、經過す可かりし也と。彌耳敦は在學一年にして、其の教師と衝突し、暫時休學するの已む可らざるに到れり。博士ジョンソンは、彌耳敦を目して、體罰を受けたる大學生最後の一人なりと云ひしも、何等事實の之を證明す可きものなき也。惟ふに彌耳敦の不羈にして、其の自信を表白するに顧慮せざる、苟も高才を愛し、異能を容るゝ襟度ある教師にあらざれば、互ひに相得る能はざりしならむ。されど彼はやがて復校して、他の教師に就いて學べり。彼は之が爲めに、其の課程に何等影響を受けざりし也。

在學七年
有餘

彼の在學は、七年有餘の長きに涉れり。彼は一六二九年三月に「バチラー」の學位を得、一六三二年七月に「マスター」の學位に進めり。彼の大學生活は、決して彼の中心より満足の境界にあらざりしが如し。彼は後來に於ても、青年の仙郷として當時を顧望せざりし也。否、彼は自から劍橋大學に對して、不感服と明言せり。彼が教育改善の必要を絶叫したるは、必ず其の實驗より來りしもの

學問上の
常經者

たらずんばあらず。

然も彼をして七年有餘の青春期を、此間に經過せしむるに就ては、何等の理由なかる可らず。蓋し彼は一切の反抗者たるに拘らず、學問上に於ては、寧ろ常經を履むを否まざりし也。多くの詩人は、落第の秀才にあらざれば、放浪の風漢なれども、彼は唯だ劍橋大學の勇圍氣に同化せらるゝを屑とせざる迄にして、其の課程の如きは、之を踐修するに、何等の不平あらざりし也。

「基督校
の淑女」

彼は同學生より「基督校の淑女」と綽號せられたり。是れ彼が姣容清貌、美人好女の如く、然も其の操履嚴正にして、漫に儕輩の疎暴豪放の事に與せざりしが爲めにして、亦た聊か彼を文弱漢視したるが爲めならずんばあらず。されば彼は講演の機會に乗じて、其の徒輩に向ひ、冷然として問うて曰く、所謂る男兒の稱號は、大碗麥酒を滿引する者に限る可き乎。鋤を手にするが爲めに、腕節頑硬なる農夫に限る可き乎と。然り、彼は決して文弱にあらずし也。

彼と同時代のワード曰く、彼の態度は溫柔也、彼の步趨は直立せり、彼は勇氣と

彼は文弱
漢たらず

一般混濁
界に孤立

不屈とを示せりと。彼自から曰く、予は日として劍法を習練せざるなし、苟も劍を帯ばん乎——予は恒に之を帯べり——縱令予以上の強者に出會するも、決して不覺を取るの虞なし、而して何者か害を加へんとするも、毫も意に介する所なしと。彼は、プロウジヤの擊刺に熟せり。彼は決して文弱漢たざりし也。

十七世紀當時の學生の生活が、如何に暴民的なりし乎は、想像するに餘れり。然も彼は恒に卓爾として、一般混濁界に孤立せり。彼自から曰く、予は宴樂、嬉譚の才能を有せずと。惟ふに彼の一生を通じて、尤も彼に缺乏したるは、輕妙なる滑稽の性情也。彼は滑稽の眞味を解するには、餘りに生眞面目たりし也。而して偶々戲謔せんと試みれば、却て鈍重、奇怪の惡趣味に陥らざるを得ざりし也。天は彼をして、雲外に翔るの鶴たらしめたるも、一鳥以て群鳥の聲に擬する、百舌鳥の能を吝みし也。

一五 大學生活 (二)

美德却て
不人望

彼の美德とも云ふ可き、清淨と、端莊とは、却て彼を同學間に不人望ならしめたり。況や彼が孤介にして、高く自から標置し、而して恒に周邊に無頓着に、大膽にして、勇往なりしに於てをや。彼は如何なる場合に於ても、信風旗にあらざりし也。彼は附和せず、雷同せず、唯だ吾が信ずる所に立てり。然も彼は其の品性の力と、其の學識の卓絶とによりて、他の不人望に打勝てり。即ち彼が二十歳の頃には、其の同學生をして、縱令彼を愛せざるも、彼を畏敬するを禁ずる能はざらしめたり。

彼は學科
の君子と
認められ
る

彼が劍橋大學に来る頃には、既に一通り拉典語の知識を備へたり。彼は在學中希臘、拉典語の以外に、希伯來、佛蘭西、伊太利等の語を兼習せり。ウード曰く、彼の課程及び學會的演習は、實に一般の嘆賞を博せり。彼は德行ある端正の君子として、尊重せられたり。然も彼も亦た自個の材能を自覺せぬ程にもあらざりし

と、是れ實に當時の彼を評する定論たるに庶幾し。彼の特色は、己を忘るゝにあらずして、己を忘れざるにあり。然も彼は自個を知らざる程の、愚物にはあらずし也。彼は自から「氣六ヶ敷性質正直なる矜傲、及び自尊心」の爲めに、他に容れられざるを語り。

彼と特待校友

されど容れらるゝと容れられざるとは、姑らく措き。彼は彼の思ふ通りの事を思ひ、大學は大學の爲す可き事を行ひ、兩者互ひに相犯さず。寧ろ大學は彼を以て、其誇りの一となしたるが如し。若し其の學力上の資格よりせん乎、彼は當然其の特待校友フェルローシップに選まる可かりし也。されど其の選は、却て彼の後進者たるエドワード・キングに歸せり。然も彼は毫も之を遺憾とす可き理由なかりし也。何となれば、當時の特待校友たらんには、必ずや身を教會の僧籍に投せざる可からざれば也。

斷乎初心を願へず

彼は本來、教會を以て其の立身の地となせり。然も彼の劍橋大學にあるや、親しく國立教會の現状を見、斷乎として其の初心を離せり。「予は幼少の時より、父

母、朋友によりて、而して予自からも亦た、教會の爲めに、身を竭さんと前定したり。然も予が成人の後に及んで、斯く迄も專制力が教會を侵蝕したるを洞見し、苟も僧籍に入らんとせば、自から奴隸たるを甘受し、恬然として虚偽の誓約を爲さざる可らざるを稔知するや、予は寧ろ咎めなき沈黙を守るの、優れるに若かざるを決心せり。」と、彼は斯る意味合にて、其の目的變更の理由を語り、されば劍橋大學に永住するは、彼の本意にあらざりしや、明けし。

沙翁の金棒曳として門出

彼の劍橋大學にあるや、其の作少からざるも、未だ彼が後來の盛名に副ふ可き作品なきが如し。但だ沙翁を頌讚したる短歌は、一六三〇年の作にして、恐らく一折本フックス沙翁集初版の標紙の裡の空白に、其偶感を詠じたるものならんも、一六三二年には、沙翁集の一折本第二版に、匿名ながらも、他の諸作家の頌詩と與に掲げられたり。彼は偶然にも沙翁の金棒曳として、始めて世に出でたり。是れ彼に取りて、決して不名譽の門出と云ふ可らず。

大學よりは優遇

彼は一六三二年七月に、劍橋を去りて父の家に還れり。彼の在學期は、精確に云

精神的變化
を受感せず

へば、七年五箇月にして、十七歳より二十四歳に互れり。而して彼自からは、其の胸底に、劍橋大學を嘆美せざりしも、大學よりは、如何に彼を優遇したるかは、彼自からの語る所にて分明也。曰く、予は吾校の教授及び諸先輩より、儕輩等の企て及ばざる尊敬を忝くせり。予が二個の學位を得て、去らんとするに際し、彼等は期せずして、各々予が長へに在らせんと欲するの意を表せり。而して其の以前も、其の以後も、懇切なる書簡を以て、恒に予に傾倒の情を效せりと。此の如く彼は兎も角も、平和を以て校門を出でたり。されど七年半後に校門を出でたる彼は、依然たる七年半前校門に入りたる彼たりし也。彼は大學生活に於て、何等の精神的變化を受感せずしが如し。

父の高齡
と棲遅

ホルトンの
光景と
彼の閑生

一六 詩人的修養 (一)

彼の父は、最早古稀の齡に垂んとし、恰も彼が劍橋を去る以前倫敦に於ける業務を他に託して、ウインズル宮より程近き、ホルトンに棲遅せり。彌耳敦は、此家に爾後の六年を経過せり。即ち一六三二年七月より、一六三八年四月迄也。

ホルトンは、夜鶯の郷として知らる。倫敦を距る、僅かに十七哩なるも、查斯一世時代の倫敦は、人口三十萬に過ぎず。汽車なく、電車なく、自動車なし。都に近きも、尙ほ田舎也。村を貫いて、ホルンの河は流れ、耕圃、牧野は、茂林、深樹と相點綴し、而してウインズルの高塔は、遠く林外に聳ゆ。幽邃、静閑、正に是れ詩人の詩情を長養する、最好の地也。彼は實に此間に於て、更に一事の心頭を累はすなく、讀書、冥想に投没したり。偶々其の平調を破るは、時に倫敦に赴き、書籍を購ひ、友人を訪問し、數學を習ひ、音楽を聞き、演劇を観たるのみ。而して彼をして、此の如く自個の欲する儘の生活を遂げしめたるもの、一に彼の父に負ふ所なくんばあらず。

天地の
一人

一生の
大領を
破したる
短歌

杜市と彌耳敦

七〇

眞に此父にして、此子ありと云ふ可し。
貴族以外の子弟の立身の道は、教會の役に就かざれば、法律を學ぶにあり。然も彼は初心を抛つて、僧籍に入るを拒めり。法律は彼の弟クリストファーの専修にして、彼は與らざる也。現在の彼は、實に天地間に於ける一個の閑人のみ。彼の友人は、彼が劍橋在學中の末期に於て、彼が無方針の勉學に耽りて、其の目的を閑却せんとするを諫めたり。然も彼は答書を裁し、慇懃に其の好意を謝して、且つ彼の心事を語りて曰く、苟も一片崇高の理想なく、止だ徒らに文藝的安逸を愛するの故を以て、焉んぞ少年の事功、奔競の炎念に打勝つを得んやと。而して彼は更に會て作り置きたる、『二十三歳に達したるの際』と題したる述懐の短歌を、書中に挿入したり。此詩や、實に彼の一生の大本領を道破したるもの也。即ち彼は二十三歳の青春期が、夢の如く等閑に去りたるを嘆じ、其の成人期に近きて、尙ほ何等の成熟したる所なきを慨し。然も前途運命の高下、貴賤、敢て卜する所にあらず、予は唯だ大主君の眼前に立つの心を以て、上天の意の導

無職業的
生活と父
の認容

く儘に奨順し、敢て寸毫も違反せざるを期すと、是れ其の大意也。詩中の情調は、彼と雖も少年の通有病たる、悵鬱、失望、煩悶の氣味なきにあらざるを示せり。されど併せて、彼が神に對する山の如き信仰と、自から持する鋼鐵の如き意志とは、彼をして其の所信を一貫せしむ可きを示せり。
彼が歸家以來、彼の無職業的生活には、寛大なる彼の父も、多少其心を痛めたりしならむ。吾人は彼が父に與へたる、拉典語の詩によりて、其の事情を諒とするを得る也。彼は其父に訴へたり、曰く、音樂家たる御身が、其子の詩人たるを、何故に訝り給ふぞ。詩は實に天來の寶也。詩と音樂とは、一體の各半片也。父子にして之を分有する、亦た宜しからずやと。彼は又た其の詩中に、富の尊ぶ可らざるを説きて曰く、御身は予を學問の爲めに教養し給へり。商人たり、狀師たるが爲めにあらざりし也。御身は拉典語のみならず、希臘、希伯來、佛、伊等の諸語、若くは天文物理の學さへも、予に學習せしめ給へり。今にして一生の目的として、營利の業に従はんとするも、豈に難からずや。予は此れ以上の物を選択せり、而して是

第三章 一六詩人的修養 (一)

七一

れ一に御身の鼓吹に頼らずんばあらず。惟ふに御身も衷情に於ては、予と此感
を同うし、此心を與にせらるゝならんと。此の如くして此の問題は、解決し去れ
り。其子の偉大なる可きを期待したる父は、認容せり。彌耳敦は依然として、勉強
的怠惰の生活に、餘念なかりし也。

一七 詩人的修養 (二)

詩人たり
んとして

天意を奉
賞する豫
言者の清
職

世には餘事、詩人となるものあり、偶然詩人となるものあり、已むを得ずして詩
人となるものあり。されど彌耳敦の如く、自から詩人たると欲して詩人たる
もの、未だ多からざる也。されば彼の詩が、白雲の卷舒するが如く、枯葉の風に舞
ふが如く、落花の無心に飛ぶが如く、單に刹那的、突發的、感興的の作にあらざる
や、問ふ迄もなし。世に政治家あり、軍人あり、醫師あり、法律家あり、然も詩人たる
彼の如く、其の専門の爲めに、修養を事としたるものあらざる也。

一般の才人には、詩は才力を馳騁する、一種の閑遊戯たる也。されど彼に取りて
は、天意を奉獎する豫言者の清職也。されば彼は詩を作るの前提として、先づ己
を作らざる可らずと云へり。彼は曰く、詩人の靈魂は、善賢、正の渾全なる體を具
へざる可らずと。一般の詩人は、放恣にして、禮法の外に馳騁するを以て、自個の
特權と見做せり。されど彼は詩人の身分を、人類第一等の位置に定め、之に求む

るに、半點の汚染なき清淨の心身を以てしたり。彼は婦人の貞節以上に、男子の貞節を唱説したり。曰く、若し保羅が男子の光飾と稱せる婦人の不貞節が、恥辱、不名譽の事ならば、神の像に形かたどり、神の光飾たる可き男子の不貞節は、假令世間普通には、斯く考へられ居らざるも、更に一層の醜惡たり、不名譽たらざる可らずと、彼は之を語りしのみならず、之を實行せり。彼は此點に就ては、俯仰天地に忤たがはずと、屢々之を公言したり。

彼の學問は多方面に涉れり、されど彼は、決して濫讀者にはあらざりし也。彼は善書を選択せり、彼は讀むと同時に靜思せり。彼は所謂「書籍に深く、自得に淺き」讀書子たることを屑とせざりし也。彼は希臘、拉典、希伯來、伊太利、佛蘭西等、あらゆる大家、名家の傑作を涉獵し、悉く之を自個の藥籠中に入れたり。否、彼は古典的精華を吸集して、自個本來の思想と融化し去れり。

現存する彼が備忘録中には、希、拉、佛、伊、英の約八十家より拔萃せられたるものあり。乃ち希臘作者中にも、十六家を數ふ。されど是れ唯だ、書中の事實を記憶せ

善書の選
擇と靜思

彼の備忘
録と其内
容

んが爲めにして、然も何れも第二流以下の作に止まれり。彼は第一流の作を、悉く自個に消化し盡くして、彼我一體となし居れり。彼は其の一心を以て、一切の儲藏所となせり。されば其の一たび詞源を傾け來るや、萬里の長江、滾々として來るが如く、千兵萬馬の整々として進むが如く、固より何等の作爲を要せざりし也。彼は大家也、他の片言零語を拾うて、自個の貧弱を賑はさんとするが如き、小家數の夢想する所にあらざる也。要するに彼は、古典の驅使者にして、其の奴隸にあらざりし也。

彼の勉學の方法も、亦た彼の本色を發揮せり。彼の性情は、實に激烈也。所謂「獅子兎を搏つに、亦た全力を用ふるが如かりし也。彼は曰く、予が一たび事に當るや、逡巡せず、中止せず、別事の爲めに退轉せず、必ず其の決勝點に達せずんば息まずと、彼は此の如くして、詩人たる可く勉強せり。彼は其の親友ヂロダチイに書を與へて曰く、卿は予が今何事を做し、何事を考へつゝある乎と問へり。予は上天の祐助によりて、不朽の業を成さんと考へ居る也。予が傲語を恕せよ、是れ

彼の勉學
の方法と
彼の性情

豫め不朽
の人たらし
んとして

唯だ卿の耳に私語するのみ、予は高飛せんが爲めに、其の翼を養ひつゝあるなりと、是れ實に一六三七年、彼がホルトン閑居の第五年目の事也。此の如く彼は、運命に餘儀なくせられて不朽の作を産し、自から不朽の人となりしにあらず。豫じめ不朽の人たらんと欲して、不朽の作を心掛けたりし也。

一八 清福の時期

幽棲六年
間の清福

彌耳敦の一生に取りては、ホルトンの幽棲六年間は、其の最も清福の期ならずんばならず。而して彼が當時に於ける作は、寧ろ寥々たる數篇に止まりしに拘らず。彼若し不幸短命にして、此際に逝かん乎、彼は英國文學史上に、一個の名家として、標識せらるゝには餘りありし也。

ラレグロ
とイルベ
ンセロソ

「ラレグロ」と「イルベンセロソ」とは、蓋し彼が劍橋大學より、ホルトンに歸住したる最近の作ならむ。何となれば、英國田舎の平和、静閑の村情、新鮮、自由の野趣は、此の中に活躍隠見すれば也。然も若し此を以て、彼が周邊の實景を描寫したりと做すあらば、是れ穿鑿に失す。

天然を大
觀せり

彌耳敦は天然を愛せり。彼は倫敦にありても、失明の後も、尙ほ庭園ある家を選んで住せり。されど彼は、人間の背景として天然を愛したるも、天然の爲めに、天然を愛したるに非ず。彼は天然に對しても、尋常人の企て及ばざる、詩人的心眼

を有したり。されど彼はウォルツウォリスの如く、無名の一草にも、造化の大能を看取するが如き、眞摯なる天然観察者に非ざりし也。彼はグレイの如く、禽鳥の嘴の異同を調査して、造物の精微に驚嘆するが如き、細密なる天然の研究者に非ざりし也。彼は天然を大觀せり。彼の天然は、葉にあらざり、況や葉の裡に巢ふ昆虫にあらざり、柯にあらざり、幹にあらざり、樹其自身にあらざり、否林にあらざり、森にあらず、野も、山も、川も、林も、牧羊も、人も、寺院も、唯だ其の總括したる光景也。

人或は彼の雲雀が窓の近くに音信れたりとの一句を見て、雲雀は駒鳥の如く、人家に接近するものにあらずと云ひ、或は夜鶯が枯枝に來り鳴きたりとの句を見て、節季と相違するを咎め、或は否是れ春初の候にして、發芽前を意味したれば、必ずしも不可ならずと辯護するものあれども、彼等は何れも、巨鯉龍に化して飛び去りたる後野塘の水争論を做すの類也。米粒に觀音を彫るは、彼の本色にあらず。彼は天を摩するの巨刃を提げて、直に天開を開かずんば止まず。

兩詩は双生兒也。前者は歡樂を主とし、後者は悲哀を旨とす。然も前者の歡樂は、

直に天開を聞く

兩詩は双生兒

前詩の内

後詩の内

騎士黨の如く放縱ならず、後者の悲哀は、清教徒の如く悔恨せず、眞に所謂る樂んで淫せず、哀んで傷らざるものに庶幾し。

前詩は、彌耳敦其人の如き、教養ある青年を主人公とし、朝露の未だ晞かぬ清曉、雲雀は中天に吟じ、農夫は鋤を荷うて、郊圃に向ふ。午時の快話、夜來の會飲、歡極まりて老幼寢に就くも、青年は家に還りて、更に書卷と、音樂とに親み、其の樂み洋洋として垠なきに終る。

後詩は、黄昏に始まる。端なく夜鶯の聲に驚かされ、彼の青年は、戸を出れば、溫柔なる月光は、四圍を銀色に包めり。彼は此の光景に對し、頓に閑愁を催し來る。更に家に還りて、此の思に沈める青年は、微かに夜警の鈴聲を聞く外、四顧幽寒、爐火漸く熾せんとする一室に、瞑坐す。夜半に到り、彼は思ふ所あり、書卷を携へて、高塔に上り、古人と卷中に向て、斯心を相照らさんとす。斯くて天漸く明けたるも、重雲暗淡、風は庭樹を搖かし、雨は屋檐を打つ。須臾にして日出づ。終夜睦を交へざる青年は、再び家を出で、巨松、喬柏の林に彷徨し、瀑布の側に一睡す。覺め

頂天立地の
獨白一己
の詩人

來りたる彼は、其の附近の大伽藍に、衆と與に參拜し、微妙なる音樂を聞きて、其心を至高の域に臻らしむと云ふに終る。人或は彌耳敦を目して、カルウインの心を以て、ピトラファクの詞を遣ると云ふ。然も彼は其の一身に、文藝復興と宗教改革とを、渾化融合せしめたる、一個の大詩人也。彼を目して、單純なる清教徒と云ふ可らざるは、猶ほ彼を目して、單純なる文藝復興者と云ふ能はざるが如し。彼には黨與なく、流派なく、傳統の兒孫なし。彼は唯た頂天立地、獨白一己の詩人彌耳敦也。

一九 魔神の謠曲

「魔神」に
於て一段
の成功

既に「アルケデス」の謠曲に於て、成功したる彌耳敦は、更らに「魔神」に於て、一段の成功を做せり。吾人は今少しく此に就て、語る所なかる可らず。謠曲は、ニリサベス朝に於て、最も流行し、查斯一世の時代に於て、尙ほ然りし也。「魔神」は一六三四年、當時の樂師ロースの需に應じ、威士の總督となりたるブリッヂウオター卿就任の饗宴の餘興として、演せんが爲めに作りたるもの也。其の趣向は、我が紅葉狩に類して、少しく複雑也。然も成功は趣向にあらざして、其の演せらるゝ場所と、演ずる人との恰當して、能く其の安排を得たるにあり。而して其の妙味は、問答にあり、歌謠にあり、單に文字の上より見ても、絶妙好辭の四字は、甚だしき浮語にあらざる可し。

一人の少貴女は、其の二人の兄弟と與に、薄暮深林中に迷ひ入りて、端なく兄弟と見失へり。此の深林には、「コマス」なる魔神が、其の眷族を率ゐて、其の威權を

一人の少
貴女と魔
神

違ふし、苟も旅客あれば、狂酒を飲ましめて、乍ち彼の顔を獸に化せしむ。今や魔神は貴女の寢音を聞き、好き獲物こそ御座れと、自在力を有する魔杖を揮うて、之を待ち設けたり。貴女は彼處に炬火と、物音とを聞き、見失へる兄弟ならんと、近づき來れば、迎ふる者は、故らに牧羊者に化けたる、此の魔神也。彼は貴女に向て、自から嚮導して、其の兄弟に廻り會はず可く語り、兎も角も明朝迄は、予が伏屋に一泊せられんことを請へり。

二人の兄弟と守護神

舞臺一轉、二人の兄弟は、其の姉妹を失うたるとを心配し、弟悲み、兄慰めつゝある際、彼方に物音聞ゆ、扱は盜賊ならんと、兄弟劍を抜いて、相待ちつゝあるに、出で來れるは、豈に料らんや、彼等の父の忠僕牧羊者シリシスならんとは、讀者注意せよ、是れ實は守護神の故らに化けて、牧羊者となりたる者なるを、彼は兄弟に向て、魔神及其の眷族の現狀を語る、弟は驚き、兄は逸り、直ちに其場に立ち向はんとす。然も守護神は、其の血氣を制し、彼の有する靈木を以て、魔神を折伏するの安全なる可きを説く。

舞臺再轉
魔神の巢窟

舞臺再轉場所は、魔神の巢窟也。杯盤狼藉、明燭煌々の裡、貴女と魔神との問答となる。此の問答は、全曲の最も精彩ある眼目にして、作者立言の目的、恐らくは此に存せずんばならず。蓋し是れ節慾を以て自由の基礎となし、節慾を以て、諸の徳行の藩牆となすことを歌ひ、且節慾によりて全うするを得たる美を、歌ひたるものなれば也。

魔神と貴女と兄弟

魔神は貴女を迷溺せしめんと欲し、貴女は毅然として之に抗す。貴女は魔神が捧ぐる狂酒の杯を喫せざるのみならず、唯だ其の唇に當てんことの懇願さへも、斥けて應せず。斯る時しも、兄弟は劍を抜き、馳せ來り、魔神の手にせる杯を捻らして、之を寸碎す。魔神遁れ去る。守護神來りて、兄弟に向ひ、彼の言を用ひず、魔神の魔杖を奪はざりしとを惜む。魔杖さへあらば、自由なる可き貴女は、尙ほ魔神に魅せられたる儘、椅上に大理石の如く坐せり。

斯て守護神は、一計を案じ、セウァン河の女神サブリナを招く。女神は舞ひ來りて、貴女の頭に淨水を點じ、貴女の唇と指先とに、三たび觸れ、乍ち貴女をして、自

女神サブリナを招く

徳を愛せ
れ自由
は

謡曲の場
所と演者

不浄主義
に大鐵

由ならしむ。曲は守護神の最後の歌を以て終る。曰く「最早や予の務は、首尾克く終れり。此よりは飛ぶも奔るも、心の儘也。地球の果より、雲蓋の極み、乃ち月界の角迄も、予に従はんとする人々よ、徳を愛せよ、唯だ徳是れ自由、徳は卿等に、如何にして高く浮世の上に攀ぶ可きかを教ふ。徳若し力なくんば、上天自から降りて、之を助けむ」と。如何に此句が、作者の會心の句なりしかは、彼が大陸旅行の際、他の需に應じて、記念簿に之を手記したるを見て、知る可し。蓋し此の謡曲の演せられたる場所は、魔神の棲窟を聯想せしむる、ラットロロ城也。貴女と二兄弟には、總督の一女二男各々之を扮し、守護神には、樂師ロース自から之に當るあり。其の當時に於て、如何に喝采を博したるかは、言を俟たざる所也。

青春の快
樂を満喫

て、根本的背馳の狀を暴露したるものにして、更らに彼が清浄主義を以て、他の不浄浄主義に大鐵槌を下したるものと見て、妨げなかる可し。博士ジョンソンは、此曲を評して、無意氣なる華麗と、面倒臭き教訓とを以て成りたる、史詩體の戯曲にして、最も詩趣に饒み、詩として最高の稱讃に値すと云へり。是れ恐らくは、中らざるも遠からざる可し。惟ふに大雪嶺の巖角にも、春來れば、尙ほ石楠花の開くあり。彌耳敦は實に青春の香に酔へり。彼は彼自身の流義通りに、青春の快興を満喫したり。青春は人生に取りて、一刻千金の時也。彼が此の時期に辜負せざりしは、如上の諸作、何れも其の明白なる證標たらずんばあらず。

二〇 詩中の彈詞

青春期掉尾の作
「リシダス」

「リシダス」は、彼がホルトン幽棲に於ける、最終の作也。博士ジョンソンは、若し彌耳敦の名を知らずして、之を一讀せん乎、何人も快感を催すものなかる可しと云ひ、マック・パソンは、英國の詩としても、彌耳敦の作としても、高水準に達したるものと云ふ、一貶一褒、何れも平允の論にあらず。されど正鵠の意見は、寧ろ前者に遠くして、後者に近きが如し。蓋し此詩は、「ラレグロ」「イルベンセロン」の如く、光景に流連し、自然と抱擁し、悠々たる吾心を以て、天地の懷裡に投ずるも、然も前二詩に比すれば、希伯來豫言者の聲を聞くが如き、沈痛、深刻、幽奥の音あり。蓋し彌耳敦青春期の作中の掉尾と云ふも、不可なき也。

學友の悼歌
「リシダス」

「リシダス」は、彼が學友キングを弔ふ悼歌也。キングは彼より三歳の幼者にして、彼より十六個月の後に、劍橋大學の基督校に入學せり。然も特待校友の補缺に際しては、キングは名家の子として、王命に依て、彌耳敦を越えて入選したり。

彼等兩人
は、最後秀者

彼は性情和易のみならず、其の材能も亦た卓絶したりとして、一般に謙認せられたり。彼は全校中、教授、學生を擧げて、最も好評判の一人たりし也。彌耳敦が如何なる程度に於て、彼と親交ありしかは、今之を詳かにするに由なきも、彼等が講堂にて相論じ、寄宿舎にて相語り、時に或は手を提へて、劍橋河畔を逍遙したるは、此の詩中より想到するに難からざる也。即ち彼等兩人は、當時の校舎に於て、最後秀者の仲間たりしや、疑を容れざる也。

キングの死と追悼
の諸作

然るに此の全校の望みたるキングは、一六三七年の夏期休暇に際し、其友を愛蘭に訪はんとして、端なく船は威士の海岸に於て、風なく波なき白晝に於て、暗礁に觸れて沈没したり。而して彼の死骸さへも、遂に發見せられざりし也。此に於てか校友相議し、追悼の諸作編纂を企てたり。此詩は即ち其の一として、出で來れり。吾人をして、今其の大綱を語らしめよ。

彼は直接にキングを悼むの作として、詠せざりし也。彼は一個の牧羊者が、秋氣肅殺の節に於て、他の牧羊者を悼むの體を、擬したりし也。されど兩個の牧羊者

兩個の牧
羊者

低徊趣味
三個發揮
の形と味
姿

の彌耳敦とキングたることは、一讀直ちに分明ならずんばならず。而して特に其の惜しむ可き理由としては、キングの詩思の高く雲霄に入りたるを、失うたるが爲めなりと、彼は歌へり。
何故に彼を溺死せしめたる乎、不思議は實に此に存す。彌耳敦は此處にて酣暢に、低徊の趣味を發揮して後、一轉更に三個の形姿を援き來れり。第一は、海の使者也、使者は彼が決して、海波の爲めに溺れたるにあらず、何となれば、當時の海は鏡の如く滑かなりしを以て也と、辯せり。第二は、劍橋河神也、河神は劍橋の龍兒の早折を哀めり。第三は、基督教會の保護者聖彼得也。即ち大牧羊者たる基督より、吾が群羊を牧せよと、依託せられたる聖彼得也。彼は眞成に善良なる補助牧者を喪へるを嘆せり。此世を擧げて、虚偽の牧者、下郎根情の牧者、自から牧羊の何事たるを解せざる牧者の、滔々皆な是なるに際して、而して群羊は、其の牧者を得ざるが爲めに、或は死し、或は饑狼の餌となるの時に於て、此の危機に於て、特に有用なる補助牧者を喪へるを慨せり。而して局面一變、山河依然、冥想遠

英詩の高
水準に達
す

愈々戦
旗を翻へす

く翔けり、曲終りて雅を奏す。

此詩の色彩鮮麗にして、音節鏗鏘たるは、眞に英詩の高水準に達したりと云ふ能はずんば、之に逼ると云ふを妨げず。されど彌耳敦の眞意は、友人の死を悼むにありし乎、將た此詩を藉りて、英國教會の腐敗を彈劾したるにありし乎。彼が聖彼得の口に託して、現在の教會當局者を痛罵したるのみならず、更らに彼等が其の天罰を被り、改善の日を見る遠からざる可しと、豫言するに至りては、聊か詩の常軌を逸したるものと云はざるを得ず。惟ふに彼の熱腸は、偶々進りて、此の激語を放射せしめたる乎、否乎。

此詩は一六三八年、劍橋大學出版の追悼集中に於て、半は匿名の姿にて、即ち僅かに彼の姓名の首字を記して、印刷せられたりしも、一六四五年、彼の詩集の世に出づるや、彼は此詩の題下に、『學友の不慮の溺死を弔し、併せて偶々當時極盛の運に達せし、我が腐敗せる僧侶の衰滅を豫説す』と、小題を標置せり。彼は此時に際しては、既に赤裸々に、其の戦旗を翻し來りし也。彼や實に戰士の眞骨

頭を有したり。然も流石の彼も、當初に於ては、斯る挑戰的の目標を掲ぐることを、顧慮したりし也。

二一 伊太利旅行

於一代記に於ける一節

伊太利の旅行は、彌耳敦生涯中に於ける、唯一の旅行にして、彼の一代記に於ける最も愉快にして、且つ光明なる一節也。彼は夙に伊太利語を學習したり、伊太利は彼に取りて、理想の仙郷たらざるも、少くとも其の初戀の樂地たりし也。彼の老父を惱ましたる訴訟事件も、落著せり。彼の母は、六十五歳にて逝けり。彼の弟は、其の新婦を携へて、父と與に同居せり。今や彼は、其の宿志を果たす可き好時節たり。此に於てか、彼は寛大なる父より、其の旅資を得、一僕と、イートン學校長サー・ヘンリー・ウオットンの添書とを携へ、其の行程に上りたるは、一六三八年四月の下旬にてありき。

巴里に於ける一節

彼は先づ巴里に赴き、瑞典公使として、該地に駐節せる、和蘭の學者グロチウスを訪へり。グロチウスは、神學、史學、法理學に於ける權威にして、其の不羈なる議論の爲めに、容易ならざる迫害を被りたる老大家也。此の老大家は、彼を厚遇し

フロレンスに愛

杜市と彌耳敦

九二

たり然も巴里の輕價、冶佻なる風氣は、彼の趣味には適合せざりしが如し。彼が此れよりニースを過ぎ、ゼノア、ピサ等を経て、フロレンスに著したるは、其の八月にてありき。如何に此地が、彼を引き附けたるかは、八月、九月の、苦熱最も耐へ難き兩月を、経過したるのみならず、其の歸途更らに二個月を、滞在したるにて知る可き也。蓋し當時の伊太利は、文藝復興の黄金時代を過ぎて、既に頽唐、衰亡の期に瀕せりと雖も、其の流風餘韻は、尙ほ他を愛著せしむる魔力なしとせず。彼が該地に於ける文藝の士より、驪迎せられ、其の文社に招待せられ、其の嘉賓として珍重せられたるは、彼我應酬の作によりても、之を卜するを得可し。但だ不幸にして、滔々たる文士中、一人の克く彼が爲めに、萬古の心胸を開拓し得るものなかりしを、是れ惜む可きのみ。

羅馬に二個月滞在

彼は此れよりして、其の十月に、所謂不朽の都府たる羅馬に達し、見物や、交際に二個月を費せり。曾て牛津大學オックスフォードにありし、獨逸人ホルステニアスは、法王廳の圖書館長として、彼の東道者たるあり。彼は又た當時威權赫々たる、最高僧官カトリックパ

彼の天性と南歐浩蕩の雰圍氣

男子の貞操を主持

アペリニの大饗宴に招かれ、當代に於ける尤も著名なる聲樂者、パロニ嬢の謠を聴けり。如何に斯女の妙音に、彼の中心歡喜の情を湛へたるかは、彼が斯女に向て、三個の拉典短歌を投贈したるを見ても、知る可し。

然も事は此に止まらざる也。彼は別に五個の情緒纏綿たる拉典短歌を、赫灼たる動作と、愛の進り出づる黒き眉の持主なる、或る貴女に投贈せり。貴女の何者たるかは、誰も知り得る者なし。彼は曾て自から云へり、餘事はいざ知らず、唯だ皇天は我に向て、美の狂熱なる愛好を賦與せりと。而して此の天性も、一時北邦の陰鬱せる雲霧に、閉鎖せられ居たりしに拘らず、今や南歐浩蕩の雰圍氣の爲めに、自然に開張放展して、此の如き文字を作したるものにあらざるなき乎。彼は論理的、一貫したる清教徒也。されど彼の一生は、如何なる時代にも、美を愛好するを禁ずる能はざりし也。彼は諸葛孔明の如く、自から好んで醜婦を娶るの、勇氣を有せざりし也。

然も彌耳敦は、何處迄も彌耳敦也。彼は後年他の批評に對して、自から一も此の

マンソ老
侯の驪迎

踵を回ら
し就く歸途

旅行中に、疾しき行爲なかりし旨を辯明せり。彼は決して自から欺かず。彼が男子の貞操を嚴に主持したるは、斷じて疑を容れざる也。然も彼が南邦の美に魅せられたるは、其の詩之を證す。彼は十一月の下旬に、ネブルスに赴き、偶然にも曾て前にタツを眷遇し、後にマリニを庇護したる、七十八歳の老侯爵マンソに紹介せられたり。老侯爵は双手を開て、二人よりも更らに偉大なる、此の異邦の新詩人を迎へたり。然も彼に向て、其の待遇の十分ならざるは、必竟舊教徒の嫉視を招くの虞あるが爲めと、辯疏せり。

彼の足跡は此れよりして、シシリ島、及び希臘に及ぶ豫定なりし也。然も其のネブルスに在る、未だ一月ならざるに、今や歸國の已む可らざるに迫れり。蓋し英國よりして、查斯一世と議會との衝突は、愈々激甚に赴くの報を齎らし來りたれば也。彼謂らく、「我が國民の自由の爲めに、生死存亡の争闘に従ひつゝあるに際し、吾獨り悠々として異郷に安逸を貪るは、洵に耻づ可きの事なり」と。此の如くして、彼は其の踵を回らして、歸國の途に就けり。

二二 歸國の途上

悠々とし
て還る

願を開き
思想を閉き

無事フロ
に抵る

然も彼は悠々として還れり。是れ彼が詩人氣質の爲め、耶將た別報は、彼が急遽の歸國を必需とせざるを傳へたるが爲め耶。彼は歸途に於て、羅馬に更らに二個月を費し、フローレンスに又た二個月を送れり。彼の旅程に上らんとするや、サー・ヘンリー・ウォットンは、彼に饒するに、一句を以てせり、曰く「顔を開き、思想を閉せ」と。伊太利は舊教の本家本元也。如何に法王の權威は、衰へたるも、如何に教養ある上流社會は、中心不信神なるも、其の信條に向て、挑戦するが如き言行を送うするに於ては、必ず其身に危険を招かざれば、不豫の憂を來たすの虞あるを免れず。是れ、彌耳敦の氣質を飲み込みつゝあるウォットン翁の、彼に對する忠告の已む可らざりし所以也。

然も彌耳敦は曰く、予は自から好んで、宗教論を吐露せず。然も若し人ありて、予が信仰如何を問はゞ、予は如何なる危険に遭遇するも、之を隱匿するを屑とせ

比すれば、其の眞摯の情味に於ては、此却て彼に優るもの多しと云はざるを得ず。是れ實に彼が拉典語詩中、第一の傑作也。然も吾人は此詩を以て彌耳敦の拉典語を用ひたる詩の、大作の終結たる一事を、記憶するを要す。是れ蓋し此の如く自由自在に、拉典語を驅使する彼も、詩としては、其の國語に加ふる能はざるを、看取したるが爲めならずばあらず。

彼がゼネパより巴里を経て、英國に歸著したるは、實に一六三九年八月にして、彼の旅行の期間は、十五個月、若くは十六個月たりし也。彼今や三十一歳、學成り識熟し、健翹既に成り、方々に飛揚せんとするの一時に際せり。彼は果して其の歸國を速めたる理由に應じて、直ちに一身を挺して、國難の裡に投じたる乎。否々、彼は依然として、學究的生活を持續したりし也。吾人は此れより、更らに觀察の方面を轉じて、當時の大勢を一瞥せんと欲する也。

第四章 英國革命時代

二三 查斯一世(一)

時勢を識らんと欲せば、其の重なる役者を識らざる可らず。是れ吾人が、查斯一世に關する概念を、擧示する所以也。蓋し彼は權臣に翻弄せられたる、一個の藁人形にあらずして、實に此の王權と、民權との衝突に際する、大立者なれば也。吾人固より、英國大謀叛の悲劇の一切の責任を以て、彼の頭上に措かざるも、少くとも彼は、其の一半を負擔す可き一人たることを、否定する能はず。

一言にして云へば、彼は犠牲者也。或る意味に於ては、時勢の犠牲者也。他の意味に於ては、位置の犠牲者也。彼にして若し王權萬能のチュドル朝に立たしめば、或は英國以外の國例せば、佛國若くは西班牙に君臨せしめば、明君として、賢主として、其の芳名を歴史に留めたらんも、未だ知る可らざる也。彼にして若し帝王たらず、僧侶たらしめば、立派なる好監督たらんも、未だ知る可らざる也。但だ

彼や最も不幸なる場合に於て、不適當なる役目を勗めたり。是れ彼一個の恨事たるのみならず、實に歴史的恨事也。

暴君暗主にあらざる

重なる缺點と小策と

彼は暴君にあらざる、又た固より暗主にあらざる。彼は品行に於ては、清教徒と雖も、以て尙ふる所なし。彼は慈父たり、善夫たり。彼の缺點は、寧ろ其の皇后の愛に溺れたるにあり。彼は文學を好み、繪畫を愛せり。彼が幽囚せられて、斷頭場の露と消ゆるに先つや、彼や伊太利詩人タソ、アリオストの諸集、及びスペンサーの仙郷の女王、特に沙翁の作を耽讀して、其の閑悶を遣れり。彼や總ての點に於て、尋常紳士の水平以上に立てり。而して更に此よりも大なるは、彼が帝王としての天職を自覺し、勵精謹恪、事を爲すに秩序あり、職を行ふに方法あり、身を處する節儉に、民の爲に圖る忠實の一事也。而して其の氣品の高雅にして、儀容の堂々たる、亦た帝王の面目を辱めざるものに庶幾かりし也。

但た彼が帝王としての、重なる缺點は、容易に二枚舌を使ひ、小策を弄するにあり。是れ彼が自から其身の破滅を來たしたる所以ならずんば、あらず。然も彼は

事物の真相を看取する能はざる

人心操縦の妙機なし

生れながらにして、虚偽漢にあらず。唯た其の困難なる境遇は、彼を驅りて此の如くならしめたるのみ。然も彼にして若し、發強剛毅の資稟あらしめば、此の如き卑劣醜拙なる舉動には出でざりしならむ。吾人は此に於てか、彼が其父惹斯一世より、薄弱なる意志を遺傳したることを、疑ふ能はざる也。

更らに帝王として、此よりも大なる缺點は、彼が事物の真相を看取する能はざるの一事、是れ也。政治家に必要な資格は、己が欲するにせよ、欲せざるにせよ、事物を有りの儘に觀察するの能力にあり。而して不幸にも、此の能力より彼は見放されたり。彼は一種の夢想者也。彼は恒に自家獨造の夢幻境に生活したり。彼は其の周圍を、己が欲する如くに見て、周圍其物の如くには見る能はざりし也。此の如き缺點は、統率者として、如何なる場合にも、見遁し難き缺點也。況や國家百年の積勢、一朝にして潰決四出する、革命の危機に於てをや。

彼は帝王としての氣象を具へたるも、其の一言以て人を生死せしむるが如き、人心操縦の妙機を持せず。彼と相見たる威尼士ヴェニスの使節、曾て彼を評して曰く、天

は彼に向て、其の言語若くは行爲に於て、何人をも感激せしめ得るの資格を、賦與せざりし也と、一言にして評すれば、彼は面を被らざる、露骨千萬なる主我的帝王にてありき。

他の勞苦に對する感謝や、災厄に對する同情や、友情の表明や、未だ一毫も是れあらず、而して一切を一括して、彼が滿腔の熱誠を捧げたるは、唯た其の皇后あるのみ、然も此の皇后に對する熱誠は、個人としては、申分なき善夫の資格なるも、帝王としては、之が爲めに其の國家を誤り、併せて一家を誤り、一身を誤り、終に千古不磨の悲劇を演ずるの、已む可らざるに到りし也、是れ豈に彼が帝王の家に生れたる不幸にあらずして、何ぞや。

皇后の愛
の千磨
不磨の
悲劇

二四 查斯一世 (二)

諺に生兵法は、大疵の原と云へり、查斯は、愍ひに帝王の天職を自覺せり、而して其の自覺や、チユドル朝の帝王專制にあり、彼は一種の形式家にして、又た法理家也、彼の一舉一動は、微細なる先例の穿鑿と、舊慣の詮議とより得來りたるものにして、彼は自から違法を行はざるとなしと信じたり、然も天下の大勢は、先例、舊慣を超越して、推移し來るものにして、眞に經世的眼識ある者は、此の活機を攫み、此の活勢を捉へざる可らず、彼がエリサベス女皇以來、醜醉し來れる、此の革命の潮先に立ちて、漫りに顯理八世以前の昔を、其の模範としたるが如きは、其の愚や實に及ぶ可らざる也、吾人は、彼が一生を始終して、其の周圍の大勢に接觸する能はざりしを、嘆息せずんばならず。

彼が幼時の教育者は、皆な帝王神權説者也、其の親しく見聞したる西班牙、及び佛國の朝廷は、何れも專制の朝廷也、彼の棲息する教會の雰囲気は、最も帝王專

不幸に
帝王の
自覺を
專制の
覺り

幼時の教
育と見聞

制の風を鼓吹しつゝある也、而して自國朝廷と其の司法廳とは、何れも專制主義の本家本元たる姿たる也、彼にして非常の人物たらざる限りは、此の策白より躍脱して、赤裸々に時務の真相を看取し、禍を轉じて福と爲すの大作用を期待するが如きは、固より至難の業と云はざるを得ず。

彼は政治の根本思想に於て、其の臣下と一致せざるのみならず、其の宗教に於ても、齟齬する所ありしに似たり。彼の母は丁抹の皇女アンにして、其の内心は、舊教徒たり。彼の父系の祖母は、有名なる蘇格のメリ女王にして、英蘇兩國に於ける舊教黨の魁首たり。彼が踐祚後數週間に於て、結婚したる——一六二五年五月——佛王の妹ヘンリエッタ・マリアは、十五歳の小女なりしも、父はブルボン家のヘンリーにして、母は幾多の法王や政治家を出したる伊太利のメヂシ家なれば、双方ともに法王の味方にして、舊教徒たるは、云ふ迄もなき也。

彼は固より國立監督教會より、一步も離るゝを肯せざれば、彼自から舊教徒化したたりと云ふは、誣言也。されど彼と清教徒とは、總ての點に於て、相容れず。特に

政治思想
の齟齬

皇后に對
する過度
の尊信

皇后は一
種の厄神

皇后の大
膽勇猛

彼が皇后に對する過度の尊信は、皇后をして政治に容嘴せしめ、之が爲めに不測の禍機を醸すに到りたるは、佛國革命時代に於ける、メリ・アントネットが、路易十六世に於けるよりも、甚だしかりしが如し。

皇后が如何なる底意を有したるにせよ、事實は則ち其の夫婿に取りて、一個の厄神たりし也。彼女の父は、新教より舊教に早換りして、バルトルミユウの大虐殺を敢行したるヘンリー也。彼の母は之を懲慝したる、歐洲大策士の家元たるフロレンスのメヂシ家のカサリン也。皇后は其の夫婿の苦心をも察せず、其の歸嫁したる英國の人情、風俗、歴史、法度をも詳かにせず。唯だ其の淺薄なる巧智を弄して、自から國家の舵を左右せんとす。其の覆没の災を招きたるも、亦た宜べならずや。

吾人は彼女に對しても、尙ほ公平ならざるを得ず。彼女は其の精力の絶倫にして、其の大膽勇猛なる、巾幗群中には、稀有の一人とせざる可らず。彼女は大風浪に際して、九回海を渡れり。其の侍女の震懼、泣涕するや、彼女は泰然自若として

曰く、未だ曾て皇后の溺死したる先例を聞かず、希くは心を安せよと。「彼女の容貌の秀麗にして、其の漆黒の瞳子の活閃、明照する、其の舉動の愛相善く、恭敬にして、其の言語の温雅、優美なる、真に絶世の佳人と云ふに憚らず。斯人にして、何故に宗教の眞義を解し得ざる乎と、自から大息を禁ずる能はざりき。」とは、彼を親しく見たる者の言也。史家ヘアネット曰く、「皇后は、最も會話に快活なる女なりき。彼女の一生は、一切の陰謀を愛好せり、然も寧ろ陰險ならず、露骨たりし也。彼女は判断に長せず、其の謀る所拙に、行ふ所更らに拙也。然も其の辯論の俊敏、活潑なるが爲めに、恒に王に多大の感化を及ぼせり。」と。皇后や固より罪あり、然も此の牝雞をして晨せしめ、遂に天下を誤らしめたるものは、固より查斯其人の責任にあらずや。

二五 革命の收穫者

查斯一世は、革命の播種者にあらず、其の收穫者也。エリサベス女皇の晩年に於ける、王權と民權との衝突は、惹斯一世に到りて、疾苦の聲より、抵抗の勢と爲り、查斯一世に到りては、更らに反噬の勢を激成せり。然も彼は此の當面の大勢を審みせず、寧ろ自個の帝王たる天職を、過大視して、遂に騎虎の勢に致されたりし也。蓋し英人——蘇格人を含む——の最も關心する問題は、信仰と財囊と也。然るに查斯一世は、宗教に於ては、清教徒を迫害し、租税に於ては、議院の協賛を経ずして、随意に徴集す。其の人心を離反せしめたるも、亦た偶然にあらず。然も若し問題が、此に底止すると思ふものあらば、そは大なる誤解也。窮極の問題は、主權が國王に存する乎、議院に存する乎にあり。此の問題は、チユドル朝の末期以來、種々の形式を以て、表現したり。但た其の双方の折衝者は、互ひに未だ徹底的眞意義を解せざりし也。然も衝突の進行に應じ、遂に其の眞相を暴露す。

るの已む可からざるに到りし也。而して此の真相を、最初に捉へ得たるもの、查斯王の側に於ては、唯だ一個のウエントウオースあり、民黨側に於ては、ビムありしのみ。

彈劾語中の豫言的

查斯一世は、其父より王冠と與に、外交上の失敗、財政困難、議院との衝突、清教徒の反抗、及び寵臣バッキンガム等を相續したり。而して此の二十五歳の少年國王は、先づ温顔軟語を以て、議院に接せり。然も議院は、當初より其の財布の口を締めたり。彼は憤然として、其の停會を命じたり。されど財政の困難は、再び議院の開會を餘儀なくしたり。然も議院は一層の反抗を逞うして、先づ寵臣バッキンガムを彈劾せり。查斯一世が查ス、及びバッキンガムに向て爲したる、彈劾満喫の豫言は、今や看すく、適中し來れり。

彈劾者の急先鋒の

彈劾者の急先鋒は、曾てバッキンガムの外交政略に、同情を表したるも、其の爲すなきを看破し來れる、サー・ジョン・エリオット其人にてありし也。彼は經世の大器にあらざるも、熱腸の快男兒也。彼は氣象高邁にして、詞章、學藝の嗜も亦た

侃諤の言論と投獄

淺からず、而して其の所信を行ふに勇猛にして、其の報國の誠心の旺盛なる。其の辯説の動もすれば、誇張に失し、其の議論の往々一方に偏倚するに拘らず、洵に議院の魁首たるを辱しめざりし也。彼惟らく苟も王にして、議院の權能を識認せん乎、一切の妥協、此中より出で來る可し。然らざれば千策萬術、要するに是れ徒爾のみと、知言と云ふ可し。

彼の侃諤の言論は、愈々出で、愈々激烈に赴き、遂に一六二九年に於て、投獄を以て酬いられたり。彼は獄中にありて、尙ほ『人の王國』なる一書を著し、其の理想の民政にあらざりして、王政にあるを陳べたり。彼は民黨側の第一犠牲者として、一六三二年獄中に斃れたり。而して其子が、彼を故郷に歸葬せしめんとするや、查斯一世は、之を聽さずして曰く、須らく彼が死せる寺區に埋葬せよと。王言の無情、此の如きは、決して民黨の驕心を得る所以にあらざる也。

扱も第二議院も、遂に解散せられたり。然も國用の多端は、更らに一六三八年に於て、第三議院を召集するを、餘儀なくせしめたり。王が民黨の重なる者を、地

第二議院の解散と第三議院の召集

權利の請
酬を以て

方官に採用し、彼等をして入選に預るを得ざらしめたるに拘らず、選舉は依然として、政府に不利たりし也。而して王が議院に向て、卿等若し經費支辨の協賛を與へずんば、朕は上天の命によりて、他の方便を斷行せんのみと云ひ、更らに附言して、之を威嚇と思ふ勿れ、對等者以外に威嚇を用ふるは、朕が屑とせざる所なりと云へり。然も議院は却て權利の請願を以て、之に酬いたり。而して其の要項は、御用金を廢止する事、專斷拘留を禁止する事、兵士を民家に宿泊せしむるを停止する事、及び軍律の濫用を取締る事にあり。王は毛頭其の實行に意なく、唯だ其の經費を得るの方便として、之を容認せり。議院は此の一著に於て、實に大勝利を得たり。

議院の反
抗と停會

然も議院は、此にて飽滿せざりし也。彼等は更らに進んで專制主義の鼓吹者たる、監督教會の僧侶を退治し、パツキングの内治外交を攻撃し、國王が議院の協賛を経ずして、噸稅、封度稅を徵集するを非難せり。而して又た之が爲めに、第三議院も停會を命せられたり。然もパツキングの問題は、僥倖にも彼が刺客

パツキン
ガム刺客
に對する

の短刀に斃れたるが爲めに、解決し去れり。彼の死するや、僅かに三十六歳のみ、然も彼や兩朝の寵臣として、其の虛榮心を鑿かしめんが爲めに、屢々不徹底の外征を事とし、國家を誤りたるもの、幾許なるを知らざりし也。然も彼の存したる間、攻撃の的は、彼にてありき。今は彼逝く。議院と查斯一世とは、何等の支障物なく、互ひに直接に、鎬を削らざる可らざるの危機に迫れり。

二六 大監督ロイド

議院の解散と領袖の投獄

一六二九年の議院は、愈々狎れ近づく可らざる情勢を示し、遂に同年三月、解散せられたり。此れと同時に、彼のエリオット以下八人の民黨領袖は、投獄せられたり。而して此れより一六四〇年四月、短期議院の召集迄、約十一個年は、全く無議院にて統治せられたり。此の期間に於て、查斯の双手となりて、専制主義を遂行せしめたるは、誰ぞ曰く大監督ロイドと、愛蘭總督ウエントウオース也。成敗を以て論ずる史家、動もすれば兩人を以て、佞者、奸物の標本と爲せども、彼等は決して此の如き陋漢にあらず。彼等には、彼等の志趣あり、彼等亦た其の自信に於て、忠實ならずと云ふ可らず。唯た其の大勢に逆行したるが爲に、事志と違ひ、志世と背きたるのみ。

ロイドは宗教的施政者

ロイドは宗教家と云はんよりも、宗教的施政者也。彼は心にもなき信仰を標榜する、偽善者にあらざる如く、亦た頑冥不靈の盲信者にもあらず。彼は唯だ軌帳

彼の人物の想像

面屋のみ。彼は唯だ規則厲行家のみ。彼は何人が如何なる意見を、内心に包蔵するかを、穿鑿するの必要を感せず。唯だ天下の教權を統一し、監督教會の規法を遂行すれば足るのみ。彼の宗教は、唯だ監督教會にして、此の教會や、唯だ國家の命令によりて成立するのみ。彼は實に此の如き見解を以て、大監督の位置に立てり。清教徒勃興の當時に於て、此の如き見解を以て、此の如き位置に立つ。國家の爲めに、危険千萬と云はざるを得ず。況や彼れ躁急なる心意、鋭尖なる舌鋒、火急なる性情の持主に於てをや。

吾人は彼に關する各種の評論を閲し、聊か其人物を想像し得たりと信ず。ピアネット曰く、「彼は學識あり、誠實にして、且つ熱心なる人也。身を處する端正に、己を持する恭謙也。然も天性熱急、突發に、動もすれば譯もたわいもなき事に頭を突き込み、世の中を騒がす僻あり」と。羅馬法王の使節、彼を評して曰く、彼や臆病にして、功名心熾んに、而して恒心なし、大事を料るに足らずと。或は曰く、彼は正且善なる人なるも、餘りに多くの熱火を藏す。彼や國事に經驗少く、而して

彼の容貌

教會の務に熱中するや過甚也、苟も其の熱火を以て、行ふ所を逞うせば、恐らくは此の國民を大火災中に投じ去らざればならずと。吾人は彼が容貌を見て、實に如上の評言の大過なきを信せずんば、彼や短軀躁質、釣り上りたる眉、見詰めたる目、銳利なる顔面、到底一騒動起さずして、已む可き漢子とは思はれざる也。されば惹斯一世が、他日國家の憂を醸さんものは、恐らくは此の僧ならんと虞れたるもの、未だ必ずしも、其の先見の明なしと云ふ可らざる也。

事實に於ける英王の法王

彼は當初より排カルウイン派、否清教徒の札附として出で來れり。其の宮廷の信任を得るや、寵臣バッキンガムに頼りて薦めり。而して查斯の皇太子たる當時より、深く結託する所あり、漸次に擢用せられ、遂に英國に於ける最高教職たるカンタアベリ大監督に進めり。此の如くして彼は、教權を掌握したるのみならず、更らに樞密顧問官の資格を以て、俗權に干係したり。彼は事實に於ける英國の法王にして、又た財政外交等の相談役たりし也。

善意を以て天下を誤る

所謂る軌帳面屋として、彼が騒動を惹起したる一例は、蘇格の長老教會に、自個の編纂したる新定祈禱書を、強制施行せしめんとしたるにあり。蘇格は長老黨の巢窟にして、カルウイン派の堅寨也。彼が監督教會の統一に熱心なればとて、如何に之が爲めに蘇格人を激昂せしめ、大事を惹起したるか。查斯の宗教干渉に反抗し、蘇格人が、兵を擧げて英國の北部を侵し、平和の談判を開始するに際し、ロッドを處分するを以て、其の最大要件の一と爲したるを見ても、之を知るを得可し。惡人にして天下を誤る、何ぞ怪むに足らむ。但だ吾人は彼が善意を以て、天下を誤りたるを惜まざるを得ず。然も是亦た半は時勢の致す所のみ。

二七 大變節漢乎否乎

所謂大變節漢と其の心事

ウエントウオースの名は、大専制家としてよりも、寧ろ大變節漢として、史上に轟けり。されど詳に彼の志趣に就て探討すれば、其の心事亦た哀む可きものなくんばあらず。人或は彼が民黨より、赤熱なる王黨に變じたるを見て、其の清操を疑ふも、彼は本來自由論者にあらず、而して復た固より清教徒にもあざりし也。彼は唯だ偶然の行掛上、其の出身の當初に於て、エリオット、ピム等の民黨と、議院に於て、其の外容を同うしたるに過ぎざりし也。

彼は大地主にして豪族に於て

彼はヨーク州の大地主にして、豪族の一也。彼は惹斯一世の時代より議院に出で、既に頭角を露はせり。偶々バッキンガムの爲めに、嫉視せられ、爲めに王家に力を竭すの志を遂ぐる能はざりしも、其の初一念の此に存したるや、其の抵抗運動に際しても、他の民黨と趣を殊にしたるを見て、知る可き也。彼が民黨に與みしたるは、王に反對したるにあらず、唯だ其の政策を是とせざりしのみ。然も

民黨王黨の大立者との對峙

其の障礙物たるバッキンガムの刺殺せらるゝあり、彼が王家に接近したるは、是れ彼に取りては、自然の順調に復したるのみ。

彼が其の方向を轉換せんとするに當り、其の友人たる、民黨の領袖の一人ピムと會見して、國內抗爭の危険なるを説き、寧ろ此際王家と妥協するの得策なるを語るや、ピムは之を遮りて曰く、「卿が吾人を見棄てんとするの意を、ほのめかさんが爲めに、斯く巧言を弄するを休めよ。然も予が語る所を記憶せよ、卿は今取り返しの附かぬ方角に向つて、進みつゝある也。然も又た記憶せよ、如何に卿が吾人を見棄つるも、苟も卿の首が其の肩上に存する間は、予は卿を見棄てざる可し。」と、是れ傳説也。其眞否は兎も角も、此の如くして彼等は、民黨、王黨兩陣の大立者として、屹然相對峙するに到りし也。

彼の容貌と人物と

彼は一舉して、查斯王の信頼を得、ロイドと與に、其の左右の手となれり。然も彼は一個の翻々たる反覆子にあらず。彼や徹底したる經綸あり、膽識あり、又た手腕あり、自信ありし也。彼が容貌は、實に彼の人物及び、政策の看板と云ふも可也。

其の面皮の暗黒色を帯び、其の眼孔の重くるしき、其の包藏せる熱情、其の矜重、沈黙にして、傍若無人なる面魂つらみしむ、彼が平生口にしたる徹底主義ソボリの注脚は、此中に存すと云ふも可也、彼は所謂ぶつきら棒にして、便辟の朝臣にあらず、其の宮廷に出づるや、舉動の疎豪にして、無骨なる、端なく調笑の種子となれり、然も調笑は、やがて憎悪と變せり、差出がましき皇后は、最も彼を嫉めり、彼の同僚は皆擧げて、彼に不利なる陰謀を試みたり、查斯一世と雖も、恒に彼を庇護しつゝも、彼の胸奥に蟠屈したる大經綸に就ては、恐らくは十分なる理解を有せざりしならむ。

蓋し彼は、夙に政争の根本問題に接觸したり、曰く、主權は國王に存する乎、議院に存する乎と、彼は國王を以て、名實俱に主權者と爲し、王權を中樞となし、立法、司法の兩權を之に陪隨せしめ、自から其の大宰相となりて、英國を歐洲に於ける、最大強國たらしめんとするにありし也、即ち彼は十九世紀の下半期に於ける、獨逸軍國主義を、十七世紀の上半期に於て、英國に實行せんと欲し、比公の所

夙に政争の根本問題に接觸

主要の目的は君國に貢獻

爲を以て、自から居らんとしたりし也、彼は固より之が爲めに、自個の位置を進め、其の權勢を増加せり、されど是れは其の副産物にして、主要の目的は、實に其の一身を抛つて、君國に貢獻するにありし也、如何に彼の政策には異議あるも、彼を目して、私利の爲めに其徳を二三にしたりと評するは、持平の審判にあらざる也。

愛蘭に於ける君主制

彼は一六二八年十二月、子爵に叙せられ、英國北部評議會長に任せられ、翌年十一月には、樞密顧問官を加へられたり、其の英國北部に於る、彼が王家に竭せし功勳は、彼をして遂に一六三二年一月、愛蘭總督目に任せしめ、翌年七月ダブリン府に赴かしめたり、爾來彼は愛蘭に於る専制君主として、殆んど意の儘に、其政を爲せり、彼は決して暴逆君主にあざりし也、彼は官僚を清淨ならしめたり、彼は産業を振起せり、愛蘭に於ける新教徒、舊教徒を互ひに衝突せしめ、俱に彼に倚賴せしめたり、要するに彼は、平和と平等とを愛蘭一般に與へたり、彼は其の赴任の翌年一六三四年、ダブリン府に、愛蘭議院を召集し、其の欲する經

費と、其の法案の通過とを得たり。而して彼は兵を練り、以て英國に於ける萬一の虞に備へんとしたり。彼は實に查斯一世に向て、如何にして專制的政治を爲す可きかの實物教育を、愛蘭より示さんと試みたり。

二八 徹底主義

兩者の徹
底政策の
行政努力

裁判官の
判決に下
す轉語

ロイドと、ウエントウオースとは、英國と愛蘭の一衣帯水を隔て、互に專制主義を呼應し、查斯王の腑甲斐なきを嘆じ、裁判官の小心なるを慨し、與に徹底政策の實行を勧めたり。ウエントウオースは、ロイドに書を與へて曰く、苟も國王をして、財政困難より脱却せしめん乎、何を行うてか、意の如くならざらんと。又曰く、予は未だ卿が英國に於て、其の裁判官、狀師を驅使する、予が此地に於て、刑事巡查を驅使する如く、容易ならざる理由を知らざる也と、彼は實に英國の情態を、齒痒く思ふを禁ずる能はざりし也。

既にして英國の裁判官が、國王の船税を徵召するを以て、正當なりと判決するの趣を聞くや、彼は直ちに一轉語を下して曰く、既に國王にして、海軍の爲に徵税するを正當とせば、陸軍の爲に徵税するも、亦た然りとせざる可らず。外寇を擊退する兵士の徵募を公認せば、其の外寇の根本を杜絶する爲めに、海外に出

大なる誤解
を起す
民を誤る

兵する事も亦た公認せざる可らずと。加之既に英國に於て、正法たる事は、蘇愛兩國に於ても然らざる可らず。果して然らば、此の判決は、國王をして國內に於ては、專制絶特たらしめ、國外に於ては、恐怖無敵たらしむる所以也。唯だ希くは臣民をして、此の如き納税に習熟せしめんが爲めに、國王の當分外戦より手を控へ給はんとを、果して此の如くんば、方さに久からずして、其の先代の何人よりも、吾王は自から有力にして、尊敬せらるゝとを、發見し給はんのみと。然も不幸にして、彼等が唯一の頼みとする查斯王は、其の理想的人物たざりし也。彼は其の主義に於ては、帝王神權説の信者なりしも、專制者たる眞頭骨を缺げり。然も彼等が更らに大なる間違は、其の國民を誤解したるにあり。英人の自由主義は、天性と云はん乎、第二の天性と云はん乎。如何なる場合に於ても、之に抵觸して、其の痛手を負はざるものなき也。英人は時としては、餘りに自個の自由を熱愛して、他の自由を尊重するを、打忘るゝことなしとせず。されど苟も自個分内の事に於ては、一毫と雖も、容易に假藉せざるは、アングロサクソン人

愛蘭に於ける恩恵
的主制君

如何に其の志を
行國に實し
英其に實し
するに實し
か

種の特色也。況や其の自由の蹂躪が、彼等の生命以外に、最も大切とする信仰と、財囊との二者に向て、襲ひ來りたるに於てをや。吾人はウエントウオリスや、ロイドが、其の自から知るの明あるに拘らず、其の相手を知らざるの愚を、悲まざらばならず。然もロイドは、一個の規律屋のみ云ふに足らず。但たウエントウオリスの大才偉器にして、此過に陥りたるを遺憾とするのみ。彼は其の屢々明言したる如く、苟も國王の爲めとあらば、予が元を喪ふも、敢て辭する所にあらずとの決心を以て、事に當れり。之が爲めに彼の在職七年間に、愛蘭は、其の歳入を倍加せり、其の議院は、彼が隨意機關となれり。彼は愛蘭に於ては、實に恩恵的專制君主たりし也。彼は自から誇れり、此の愛蘭に於ては、吾國王の位地は、世界の如何なる國王に比するも、其の專制絶特に於て、敢て譲る所なしと。

然も彼の志や、愛蘭に止らざりし也。彼は之を以て英國に及ぼさんと欲したる也。彼は實に其の所期の如く、徹底主義を實行せり。朝廷會て後にヨークの大監

督たる、ウイリアムスの不平を慰藉せんが爲に、愛蘭に於ける或る監督區を
 與ふるの内諭を傳ふ、彼僧駭然として曰く、此れのみは御免を被りたし、予は今
 や七年間、英國に於ける反對者の壓迫を支持し來れり、苟も愛蘭に赴かん乎、是
 れ七個月以内には、何等かの口實の下に、必ず予を斷頭す可き人の手裡に、予の
 一身を托する也と、亦た以て彼の愛蘭に於ける、威權の程度を知る可し、問題は、
 如何にして之を英國に實行するか、に在る也。

然も徒らに小策に汲々として、恒心なき查斯王は、徹底一貫のウエントウオー
 スにあらざる也、征伏せられたる愛蘭人と、不羈獨立なる英人とは、同視す可ら
 ざる也、而して更らに危険なるは、其の經世の見識に於て、其の大政治家の手腕
 に於て、優に彼と拮抗し得るのみならず、議院政治家としては、百の彼も以て敵
 する能はざるビムを、其の對手となしたるに在る也。

吾人は查斯一世と、議院との衝突史を按じて、實に其の失敗を悼まざんばあら
 ず、查斯王としては、固より自業自得と云ふの外なかる可し、されどウエントウ

英本土と愛蘭とは
 同視す可からず

第一流の王者
 たる人

オリスとしては、假令自から、其の豫言の如く、一命を革命第一著の血祭に供し
 たるも、死して餘憾なしと云ふ可らず、彼にして事ふる所、若し明主ならば、恐ら
 くは彼の末路も、彼が如く悲惨ならざりしならむ、然も彼や革命派の敵役とし
 て、實に第一流の人傑と云はざるを得ず、彼は決して變節漢にあらず、彼は最硬
 漢のみ、彼や其の所信に殉じたる丈夫兒のみ。